BX
8748
S88
1913
GTU
Storage

Digitized by the Internet Archive
in 2023 with funding from
Kahle/Austin Foundation

https://archive.org/details/suedenborugu0000suzu

GRADUATE THEOLOGICAL UNION
LIBRARY
1962

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口
定價八十錢
郵稅八錢

著者心内に欝積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著『廣長舌』『惡戰』等に比し來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士村上專精先生主筆
月刊雜誌
人道講話
一册　七錢五厘
一年分八十二錢

『人道講話』は村上先生の人道講話を連載するもの也
『人道講話』は教育宗教道德の三面を有す
『人道講話』は精神の涵養を以て教育の本領とす
『人道講話』は人道の實踐を以て宗教の要務とす
『人道講話』は父母の孝養を以て道德の大本とす

記者松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊雜誌
藝文
一册廿二錢
半年分一圓廿錢
一年分二圓卅錢

『藝文』は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
『藝文』は東西兩洋の學術文藝に對し莊護嚴深刻の批判を下さむとする者也
『藝文』は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

釋清潭先生著
狐禪狸詩
定價六十錢
郵稅八錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠狸詩の窟一蹴して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

釋清潭先生主筆
月刊雜誌
漢詩
一册五錢
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とせる漢詩園淡社の機關雜誌にして每號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を揭載す別に漢詩漢文の添删代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則揭載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晚晴樓文鈔
定價八十五錢
郵稅八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり說あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり題跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須ゐさるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然卷を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繙かば凉風自ら起つて神氣淸爽を覺えむ

大內靑巒先生著
結城素明畫伯畫

禪の極致

定價六十錢
郵税八錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ること能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ、古來禪を說くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出てゝ愈々迷はしむることを。大內先生學深く德高く、教禪二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗話を以て、幽玄の理を說き、深遠の法を語ること、殆ど天下獨步、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附錄『五位頌講話』、また先生獨創の見識を以て、縱横に講解す、蓋近來の大文字なり。

黑岩周六先生著

予が婦人觀

定價六十錢
郵税八錢

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黑岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々樣々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を翼ふ

記者 壺月、咄堂、我觀、米峰
黃洋、縱横、秋畝、大拙

月刊雜誌

新佛教

一册十六錢
半年分一圓十錢
一年分二圓

『新佛教』は自由討究傳說排斥の大義に基き吾人の全精神を滿足しつべき新信仰を鼓吹し今日の時世に適應すべき新道德を扶植せむとするものなり

『新佛教』は光明を求め大道を傳ふ法を覔り道を嗣くものにあらず

『新佛教』は自主獨立能く言ふべきを言ひ語るべきを語る他の保護の下に蹈跡して言ふべきを言ひ得ず語るべからざるを語るが如き者にあらず

文學士　沼波瓊音先生著

此一筋

定價七十錢
郵稅八錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそうな方にのみ、これを侑む。」と本屋曰はく「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛敎徒同志會編

來世之有無

定價七十錢
郵稅八錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するのか滅しないのか元來吾等に靈魂などゝいふものがあるので無いのか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑團も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著

現代靑年論

定價十五錢
郵稅二錢

本書は著者が某會社の靑年に向つて講演せるものゝ筆記にして各種靑年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し

一、靑年の力―二、今の靑年は依賴心が強い―三、今の靑年には氣慨がない―四、今の靑年は成功を急ぐ―五、今の靑年は一事に精しくなくて多岐に勞する―六、今の靑年は思想が羸弱である―七、今の靑年は信仰が乏しい―八、今の靑年は同情が乏しい

文學博士 三宅雪嶺先生著

增訂 偉人の跡

定價金壹圓
郵税金八錢

古今東西の偉人數十名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面目は躍如として玆に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にして修發したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せしか社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著

小泡十種

定價金四十五錢
郵税金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なると世既に定評あり今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を說き文學を語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては浩渺盡きさる大河となり散じては繽紛限りなき飛沫となる小泡が激湍か蕩し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢
郵税金六錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高境に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして剴切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の產物なりしかを知悉して依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

平子鐸嶺先生遺著

補校 上宮聖德法王帝說 證註

正價金一圓　郵稅金八錢

『上宮聖德法王帝說』はその紀事切實その文詞醇古多く燬燹已往の記錄を取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須ゐず而して狩谷棭齋先生の『證註』に至つては群說を折衷し正謬を辨別して先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尚多少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽强記にして史眼犀利棭齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足らざるを補ふに錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

文學博士 村上專精先生編

科註原人論

定價金十二錢　郵稅金二錢

科註大乘起信論

定價金十六錢　郵稅金二錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置きたれば學校の敎科書學會の講本として最も適當なり

高島米峰先生著

學生參考 東洋史

定價金十三錢　郵稅金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべからむも學生を資くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑はざるなり」と

アー、エフ、ステンツラー先生原著
エル、ピツシエル先生增訂
ドクトル、フイロソフイエー 荻原雲來先生譯補

梵語入門

定價金壹圓
郵稅金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は咸な歐語の梵文典を使用すされど歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學はざる可からざる不便あり第二價格低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむがために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし

文學博士高楠順次郎先生閱
曹洞宗大學教授 立花俊道先生著

巴利語文典

定價金一圓
郵稅金八錢

著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下にありて巴利語を修むること多年、其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる巴梵兩語の辭典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり、敍述の前後には多大の注意を拂ひて簡より繁に入り、易より難に進むの方法に從ひたれば初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべし

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿滿得壽先生著

悉曇阿彌陀經

定價金壹圓
郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘經なり。特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡ばんが爲なり。梵文に加ふるに漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐秦二譯を揭げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺ふに易からん

マクス、ミュラー博士原著
文學士 清水友次郎先生譯

宗教學綱要

定價金五十五錢
郵税金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マックス、ミュラー博士の原著を譯本とし隨つて譯し隨つて敎ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり

第三高等學校敎授
文學士 野々村直太郎先生著

宗教と倫理

定價金五十錢
郵税金八錢

正にこれ新宗敎論なり新道德論なり而してまた實に人世問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に惱める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗敎と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附錄には二宮尊德翁の宗敎論を評す

眞宗補敎 北條蓮慧先生著

眞宗の敎義

定價金二圓
郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛敎の精華にして又實に日本佛敎の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資蓮如上人との敎義を信仰上より研究したる結果を組識的に敍述したる者なり他力敎の秘奧を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

東洋大學講師
釋清潭先生著

寒山詩新釋

定價金五十錢
郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ詞語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一鎚勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
釋清潭先生著

和漢高僧名詩新釋

定價金五十錢
郵稅金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に渉たり、和は虎關以後絕海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり、其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの淸秀なるもの幽淡なるものの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を網羅して此の如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
忽滑谷快天先生評釋

和漢名士參禪集

定價金五十錢
郵稅金八錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時賴北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡裴休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の謦欬に接するを得しむ

明楊起元評註
加藤咄堂先生和譯

和譯維摩經評註

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達の文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著

原人論講話

定價金六十錢
郵稅金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶄然一頭地を拔く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし、著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ鼇頭には添ふるに古人の解說を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著

通俗講話の理論及方法

定價金九十錢
郵稅金八錢

通俗教育の必要日に逼りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豐富なる經驗とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解說し多くの例話を擧げてその使用法を示されたるものなれば教化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一卷の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繙かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
境野黄洋先生著

増補 聖徳太子傳

定價金五十五錢
郵税金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖徳太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大内青巒先生序
高島米峰先生著

一休和尚傳

定價金九十錢
郵税金八錢

元日に髑髏を振廻はして人の度膽を拔き末期に糞を踞つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一簑一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著

達磨と陽明

定價金七十五錢
郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を豁開して餘蘊なく道徳の工夫修養の方法爲學の用心精神錬磨入格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり

東京帝國大學講師
文學士　常盤大定先生著

釋迦牟尼傳

定價金七十錢
郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩派の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士　遠藤隆吉先生著

孔子傳

定價金壹圓四十錢
郵税金十二錢

その渉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未發の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
亘理章三郎先生著

王陽明

定價金一圓五十錢
郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

文學博士 松本文三郎先生閲
文學士 羽溪了諦先生著

釋尊の研究

定價金壹圓
郵税金八錢

本書は先づ釋尊以前の婆羅門教の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に說き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脫の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に教界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生著

彌勒淨土論

定價金壹圓
郵税金八錢

宗教學上殊に佛教史上理論實際の兩方面に渉り極めて重要なる地步を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明により光輝を放てるも其他の半面は「彌勒淨土」の埋沒によりて全然暗黑に歸すこれ豈佛教史上の一大缺點にして又實に佛教界の一大恨事ならずや松本博士多年の造詣を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の舊著「極樂淨土論」と相待つて玆に佛教の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛教の淨土思想を談ぜんとするものぞ

ポール、ケーラス先生著
學習院教授 鈴木大拙先生譯

阿彌陀佛

定價金三十五錢
郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケーラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評嘖々たることや彼社幾に十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悩ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

文學博士 井上圓了先生著

南半球五萬哩

定價金九十錢
郵稅金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南阿南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十錦上更に花を添ふ

文學博士 井上圓了先生著

活佛教

定價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

明治の宗教界思想界を震駭せしめたりし「佛教活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛教をして活佛教たらしむるの福音

帝國大學教授 文學博士 高楠順次郎先生著

國民と宗教

定價金七十錢
郵稅金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳說せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳著たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演說講話の好模範たるべし◎附錄として研究上修養上極めて重要の論文數種を收む悉く學界の珍

東北大學總長
澤柳政太郎先生著

退耕錄

正價金壹圓
郵稅金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも偶ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感慨あり滑稽あり紀紹あり理窟あり警抜にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くして毫も時勢に阿らず誠に憂國警世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

フェヒチル先生原著
文學士 平田元吉先生譯

死後の生活

定價金五拾錢
郵稅金八錢

本書は現世の實質を基とし最高の詩的想像を交へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱橫に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得故に本書は親愛者を失ひし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を起し又學者研究者に有益なる暗示刺戟を與ふるや疑ふ可からず

ベークマン先生原著
杉村縱橫先生譯補
改訂增補

强肺術

定價金四十錢
郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め肺病に罹れるものは讀め歐米に於ける最新式の體力養生法を讀め此書に六の特色あり 第一、時間を要せざること 第二、費用を要せざること 第三、場所を要せざること 第四、勞力を要せざること 第五、言文一致なること 第六、總ふり假名付なること 故に男子は勿論婦人小兒と雖も容易に實行し而して確實に其功を收め得べし

スタンフオルド大學總長
ジヨルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ
中村　平先生譯

人物の修養

定價金五十錢
郵稅金八錢

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジヨルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情並に之を知ることに依て利することの尠からざるは言を待たず……我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と

ウヰリヤム、ハイド氏原著
鈴木券太郎先生譯補

修養處世 自己測量

定價金五十錢
郵稅金八錢

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に應めむとするもの他なし吾人が惡德邪辯の鞭朴人格完成の砥礪立身處生の指導社會道德の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年紳士がこの生活難の世に處して新しき運命の秘庫を開くべき鍵はこゝにあり

黑岩周六先生講演

人生問題

定價金七十錢
郵稅金八錢

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を說き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黑岩先生自ら人生問題に逢着して疑問の源泉を探り大に其深秘を得て玆に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人遂に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て溫く且つ光ある人生に觸着することを得ん

文學博士 村上專精先生著

改訂増補 **自信録**

定價金六拾錢
郵税金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の奧底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さゞるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし

文學博士 村上專精先生著

誠のしるべ

定價金四拾錢
郵税金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め

文學博士 村上專精先生著

女性訓

定價金四十錢
郵税金六錢

本書の内容は天職中庸質素謙讓節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を摑み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
東北大學總長 澤柳政太郎先生序
楞所 千河岸貫一先生著

修養史譚

定價金壹圓
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同轍の好資二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵
林董閣下纂譯

修養の模範

定價金七拾錢
郵稅金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譚の乏しいのに弱り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む每に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を翻譯摘錄して遂にこの書を成すに至つたのである弊社今こゝに世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である

文學博士 村上專精先生著

通俗 修養論

定價金壹圓
郵稅金八錢

古聖賢踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規範とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を說明し苟も模範とするに足るべき嘉行美譚は悉くこれを蒐錄して依つて以て極めて明快に修養の方法を敘述す恐らくはこれ前人未だあらざる精到完備の修養書たらむなり

三宅雪嶺先生序
高島米峯先生著

廣長舌

定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峯今胸中鬱勃の氣を瀉して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企だて及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を透して當世人士の肺腑を剔る洵にこれ堂々警世の大文字」と

加藤弘之先生序
高島米峯先生著

惡戰

定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき裸一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

島田三郎先生序
高島米峯先生著

理想的商業

定價金二十五錢
郵稅金四錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人屁こ垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を說きこの道を敎へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと皆ぐるものは即ちこの書なり

加藤咄堂先生著
筆と舌
定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演說と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の靑年を奮起せしむるに足る大文字なり

村上博士序
藤井瑞枝女史著
亂れ雲
定價金八十錢
郵稅金八錢

才筆明治の淸少納言俠氣女次郞長の稱ある女史が舊組織舊道德に對する呪咀叛逆の聲を聽け

「無我愛」首唱者
伊藤證信先生著
新氣運
定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と敎權の束縛より脫却して世の罵詈嘲笑輕侮憎惡の中に立ち臆面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの！

カウツキー先生原著
堺利彦先生譯

社會主義倫理學

定價金壹圓
郵稅金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偏狹なる因習道德が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の蒙を啓き此の昧を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸德秋水が最後の文章

基督抹殺論

定價金七十錢
郵稅金八錢

一代の論客として知られたる幸德秋水も誤つて天地の容れざる大逆無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に呻吟せるの間特に此一卷を著す所論痛絕快絕行文悲絕愴絕嗚呼幸德秋水死に臨みて基督を抹殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の愛讀を冀ふ

文學士 渡邊又次郎先生著

最新論理學

定價金一圓廿錢
郵稅金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる敍述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又欄外に重要なる題目を揭げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

堺利彦先生著

樂天囚人

定價金六拾錢
郵税金八錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文社長 堺利彦先生著

賣文集

定價金壹圓
郵税金八錢

卷頭之辭 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短贊否奇拔痛快の評語 **序** 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る **第一編** 一、唯物的歴史觀 二、子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、木下尚江君を評す **第二編** 一、暮春の古服 二、予の夢 三、墓地見物 四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 **第三編** 喜劇「谷川の水」(バーナード、ショウ原作) **第四編** 一、告白、荒畑寒村 二、クレンクビユ、大杉榮 三、謀叛人耶蘇、高畠素之

堺利彦先生譯

ルソー自傳

赤裸の人

定價金九拾錢
郵税金八錢

佛國の革命はルソーの「民約論」によりて點火せられ日本の教育界はルソーの「エミール」によりて啓發せらる波瀾頗飛神出鬼沒の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彦先生なり一讀してルソー前に立てるの感を起さしむ

「萬朝報」記者　大住嘯風先生著

現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵稅金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳統を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソンの如き現代思想を代表する大思索家の說くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深邃なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に接して自己を發ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士　久津見蕨村先生著

現代八面鋒

定價金八拾錢
郵稅金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり敎育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗敎あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

暮村隱士　久津見蕨村先生著

眞人僞人

定價金壹圓
郵稅金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か痛癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ僞人はこゝにその面皮を剝かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの慨あり

佛教講義錄

僅に一ヶ年で佛教の大系が學び得られる

學界空前の佛教講義錄

佛教がわからなくては日本の歴史の解釋が出來ない日本の文學も味ふことが出來ない日本文明の由來するところも知ることが出來ない從つて佛教を知りたいといふ人は多いが唯識三年倶舍八年では手もつけられないそこで誰にでも手つ取り早く佛教の大系が飲み込めるやうにといふので現代有數の學者に請うてその專門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して杜撰な代作講義を掲載するが如きものと同一視することなかれ

- 佛教研究法　東洋大學教授 宗教大學教授　島地大等
- 佛教概論　加藤咄堂
- 印度の佛教　宗教大學教授 ドクトル　荻原雲來
- 支那の佛教　東洋大學教授　境野黄洋
- 日本の佛教　豐山大學教授　境野黄洋
- 歐米の佛教　宗教大學教授 ドクトル　渡邊海旭
- 佛教の經典　帝國大學講師 文學士　常盤大定
- 法華經義釋　天台大學教授 日蓮大學教授　島地大等
- 禪學要義　加藤咄堂
- 佛教美術　帝國大學講師 文學士　中川忠順
- 宗教學要義　眞言大學教授 文學士　融道玄
- 基督教綱要　慶應大學教授 東洋大學教授　廣井辰太郎
- 神道綱要　足立栗園

其他臨時講義を增加すべし

毎月一回十五日發行、一冊菊判二百頁、滿一ヶ年（十二冊）完結

	一ヶ月分	三ヶ月分	半年分	一年分
購讀料	六十錢	一圓五十錢	三圓	五圓五十錢
束修	五十錢	五十錢	不要	不要
合計	一圓十錢	二圓	三圓	五圓五十錢

「大正文庫」

文學博士三宅雪嶺先生著（定價五十錢郵稅六錢）
第一編 明治思想小史

文學士 沼波瓊音先生著（定價七十錢郵稅八錢）
第二編 此一筋

新佛教徒同志會編（定價七十錢郵稅八錢）
第三編 來世の有無

大内青巒先生著（定價六十錢郵稅八錢）
第四編 禪の極致

黒岩周六先生著（定價六十錢郵稅八錢）
第五編 予が婦人觀

釋清潭先生著（定價六十錢郵稅八錢）
第六編 狐禪狸詩

高島米峰先生著（定價八十錢郵稅八錢）
第七編 噴火口

杉村楚人冠先生著（定價六十錢郵稅八錢）
第八編 ひとみの旅

加藤咄堂先生著
第九編 書窓車窓

佐々木照山先生著
第十編 散彈

文學博士 村上專精先生著
第十一編 人間萬事廿年

内田魯庵先生著
第十二編 紅茶番茶

大正二年十一月三日印刷
大正二年十一月六日發行

定價金五拾錢

著作者　鈴木貞太郎

發行者　東京市小石川區原町六番地　高島大圓

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　佐久間衡治

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　株式會社秀英舍

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地　振替東京一五六八六　電話番町二六〇八　丙午出版社

す、而して證智はまた生命に屬し、從ひて善に屬するが故に、證智の證智たるはまたその無垢の度に比例す。　愛、仁、信の場合における亦然り、故に無垢の心なきものは、天界に入るを得ずと知るべし。（「夫婦の愛」四一四。）

の如し、火そのものゝ如し。

愛は人の生命なり、故に愛は人そのものなり。(以上二項、「夫婦の愛、」處々に散見。)

人の人たるはその愛即ち意志にありて、その智性にあらず、故にその智性如何に高くとも、その愛低くければ、愛のために役使せらる。(こはスヱデンボルグの主說にて、その著書には到る處に此意を述ぶ。)

無垢は善の實體なり、善の善たるはその無垢の度に比例するものと

世間底の事となして之を讀むべし、即ち只好奇心の滿足を買ふために之を讀まんとすべし。第三種は智慮分別上よりして之を讀み、その幾分を喜ぶことあらん、されど之を實際の生涯の上に適用するに及びては、更に進步の跡を示さず。第四種は之を受けてその心に信ずるところあり、かくて或る程度まではその生涯を改め、諸々の用を成就す。第五種は喜んで之を容れ、實地の生涯の上に之を確定せしむる人とす。

（「靈界日記」二九五五。）

愛は靈の融合なり。愛は靈火なり、靈熱なり、人の心に活ける靈の熱あり、これを感ずれば愛となる。愛の力たるや斷絕することあらず、熱

一言にて曰へば、自我の愛と世間の愛とは、主に對する愛と同胞に對する愛と正反對の位置にあり。故に自我の愛と世間の愛とはこれ地獄所屬の愛なり、また地獄において最も大なる勢力あり、而して人間のうちに地獄を作るは實にこれなり。されど主に對する愛と同胞に對する愛とは天界所屬の愛なり、また天界において最大なる勢力あり、而して人間の中に天界を作るは實にこれなり。(「天界敎說」七八。)

わが著述を讀むものに五種あり。第一種の人は始めよりして之を拒絕す、何となれば彼等はわれと全く相違せる信心を有すればなり、即ち何等の信仰にも住せざればなり。第二種はわが言を以て尋常一樣

り、人は其思惟するまゝに言語す、否らざれは、その音聲荒れすさみて聽くに堪へず。 されど默せんと欲せば難きにあらず、其心に思ふ所はかくして他に知らしめざるを得べし。 故に僞善者ありて靈界に來り、證智あるものゝ間に入るときは、自ら退き去るを常とす、然らざれば一隅に潜みて出てす、他の注目を避け默然として兀坐す。(「默示錄示現」二九四〇)

宗教と云ふは、神の爲に、人に對して善をなすこと、即ちかくして神とその行動を一にすること、神よりしてその行動を起すこと、此の如きのみ。(同上、四八四。)

われ深く塵世の事を思ひたるとき、例令ば必要なる金錢の事などを思ふとき、即ちわれ今日手紙を認めながら、暫くの間此事につきてその心を勞したるが、その際われは恰も物質的境涯とても云ふべきものに陷りて、精靈はこれと語を交ゆるを得ず、さながら全くわれを捨て去りたる如くなりき。(同上、一一六六。)

自然界にては人の言語は兩重なり、そは人の想念に、內外の兩重ありて內想と外想との兩面より一時に言說し得べく、また外想のみより言說し得べし、否、內想と全く相合せざる言說をもなし得べし。此くして詐あり、諂諛あり、僞善あり。されど靈界にては言語に兩重なし、單一な

所謂哲學なるものに沒頭すること甚だしければ、それだけ其人の迷盲と闇黑とは大なり。迷盲と哲學とはその歩調を共にす。こは多くの事物につきて證據し得べき事實なり。(「以賽亞解說」。)

わが實驗より知り得たる所によれば、われ天界にて彼處此處と案內せらるゝに當りて、わが思一たび塵世のわづらひの上に落つる時は、其時天堂にてわが見たる所、忽然として消え去りき、かくて塵世のために其心を煩はすものは、即ち天界よりすべり落つるものなることを知りぬ。(「靈界日記」三〇四。)

を婢僕として愛するなり、故に愛我に住するものは、教會・國家・社會・同胞の彼がために服事せんことを願ひて、自ら之に服事するを願はず。何となれば彼は自ら是等の事物の上に卓立し、之をして己が脚下にをらしむればなり。故に人、愛我に住する限りは、自ら天界より遠ざかる、そは天界の愛より遠ざかればなり。(「天界と地獄」五五七。)

自然界に存在する一切の事物は結果(エフエツクト)なり、而して靈界に存在する一切の事物は此結果に對する原因なり。その原因を靈の上より得來らざる自然はこれ無なり。(「神愛」一三四。)

しも禁ずべからず、是等は善なりと云ふに至るべければなり。青春の交、諸惑に耽溺して制する所を知らず、之と同時に心より神の事物を斥くるものを見ば、吾言の然るを知るべし。（「天界と地獄」五三三。）

愛我を天界の愛と比するときは、その如何なるものなるかを明かに見得べし。　天界の愛とは用（ユース）の爲に用を愛し、善の爲に善を愛して、教會のため、國家のため、社會のため、同胞の爲に之を躬行するにあり、之を神を愛し、隣人を愛するといふ、一切の用と一切の善とは神より來り、而して此中に亦己が所愛の對象たるべき隣人あればなり。　されど己が爲の故に是等の事を愛するは、之をして己に服事せしめんため、即ち之

も其自由意志によりてかくの如く思惟し得べければなり。されど彼もし其初歩を得れば、主は彼が心の中に伏在せる一切の善を促進せしめ給ひ、彼をして啻に諸惡を看取せしめ給ふのみならず、また之を意志することなからしめ、遂に之を嫌惡して措かざるに至らしめ給ふべし。主の言に「わが軛はやすく、わが荷は輕し」とあるは之を云へるなり(馬太傳、第十一章、三十)。されど茲に知らざるべからざるは、此の如く思惟するの困難、又惡に抵抗するの困難は、その人の意志よりして惡をなすの度如何に比例することこれなり、何となれば彼は自ら惡に慣れて、遂に之を看取する能はざるに至り、其後は之を愛し、又此愛に伴ふ歡によりて、之に惑溺するや、一切の虛僞によりて之を確定して、是等の惡は必ず

人の信ずる如く、天界の生涯を辿るの難事にあらざることは今又次の道理によりて明かなるべし、即ち人もし其心に念ふ所ありて、而して其念ふ所の誠ならず、義ならざるを知るときは只當さに下の如く思惟すべし、曰く、「こは神の敎誡に背くが故に、われは之を爲すべからず」と。彼若し常にかく思惟するに慣れ、從ひて之によりて一種の習性を養ふに至れば彼は次第に天界と和合すべし、かく和合するに從ひて、彼は不實不義の何ものなるかを看取すべし、彼はかく此等の不善を看取するに從ひて、之を放下せんとするならん、蓋し不善を放下せんには先づ之を看取せざるべからざればなり。

人はその自由の意志によりて此情態に入り來るものとす、そは何人

靈的情態なり。されば天界も地獄も此世を離れてあるにあらず、また此世直ちに是れ天界、地獄と云ふにあらず。此間の關係は不即不離なりとでも謂ふべきか。既にわれらの靈性的生涯には時元なく、空元なしとせば、而して天界と地獄とは此生涯の上の消息なりとせば、スヱデンボルグ上來の所述を以て現實の想を起すべからざるや明かなり。讀者輕率の觀をなすを得ざれ。これ「相應」、「表像」などの說ある所以なり。

尙左にスヱデンボルグの敎ふる所いかんを示さんため、その著書より少しづゝ抜萃せる所を掲ぐ。

度の責罰を受けたる凶靈は地獄より逐はれて此の如き荒野に投げ棄てらる。特に世にありたるとき欺巧を弄し、譎詐を工むと他に勝れて妙を盡くせるものは、此に來りて彼等が最後の生涯を營むものとす。』

ス氏の靈界觀を正當に解せんには、表像（レプレゼンテーション）の說、相應（コレスポンデンス）の說、度（デイグリー）の說、流入（インフラツキス）說などを知るべき必要あれども、此書は此の如く深入りすべきにあらざれば、讀者須らく「天界と地獄」（ヘヴン、エンド、ヘル）(既刊)「神愛と神智」（デイヴアイン、ラブ、エンド、デイブアイン、ウキスダム）(近刊)「神慮論」（デイヴアイン、プロヴヰデンス）(近刊)等につきて親しく研究せらるべし。

但、此に最も注意すべき一事あり、そはスエデンボルグの天界及び地獄なるものは空間と時間とに制約せらるるものにあらずして、一種の

には、其行動亦惡に基けども、只その外分よりせるものをる、これ即ち惡よりせる虛僞に基きて行動せるものなり。或る地獄には恰も火災後の家屋及び市街の燒け殘りの如きものありて、凶靈此中に隱れ住めり。寛やかなる地獄には恰も粗造の小屋に似たるものあり、或は連接して、一箇の都市をなして、道路通ぜり、屋內に住める凶靈間斷なく鬪爭し、抗敵し、相擊ち、相戰ふ、道路には、盜賊・搶剝横行す。或る地獄には只淫房のみあり、汚穢と糞土とに充てり、面を向くべからず。又茂れる森あり、凶靈此處に徘徊すると猛獸に似たり、又此地下に洞穴ありて、他のために驅逐せらるゝときは彼等此裡に隱る。或は地瘠せて砂のみなる砂漠あり、或は岩石亂立して、洞穴を有せるあり、或は小屋の立てるあり。極

り、彼等はその時掩蓋に拘はらず地獄を見得るなり。　わが地獄を見るを許されたるもまた是の如くにしてなりき。　ある地獄は岩間にある窟の如く、洞穴の如くにして、内に向ひ、その後轉じて斜となり、或は直下して、遂に無底の淵に入る、或は猛獸の森中に住める如き洞穴及び窟に似たるあり、或は鑛穴の如く、孔道下に通じて、地窖及び窮穴に似たるあり。　大率、地獄は三層となれり、上層は黑暗々なり、そは此處には惡よりする諸僞にをるもの住めばなり、下層は火に似たり、そは此には惡そのものにをる凶靈住めばなり、何となれば黑暗々は惡よりする諸僞に相應し、火は惡そのものに相應すればなり。　地獄の深き處には、其行動、惡に基づきてその内分よりこれを僞せるものをり、さまで深からざる處

るものは細くして窄し、西を經て南に進み、かくして天界に通ず。されど右せるものは、廣くして大なり、斜めに下向して地獄に通ず。始めは一切の精靈同一路を行くが如く見えたるも、大石ありて路の分る頭(はとり)に至り、此點において彼等相分離せり。善きものは左回して天界に通ずる直路に入りたれど、あしきものは石のあるをも見ずして、之に躓き倒れて自ら傷つけり、其復た起つに及びてや、彼等は地獄に通ぜる右方の大道に向ひて走り去れり。

『われ地獄をのぞき込みて其裡に如何なる處あるかを見るを許されたることあり、何となれば主の意(こゝろ)に稱ふとき、主は精靈或は天人をして上方より瞰下して地獄の深底を洞觀し、其性相を點檢せしめ給へばな

のみによりてその全豹を窺はんとすれば、却て誤りを來たすことあらんも知れず。わが之を此に引用したる目的は、スエデンボルグは如何なる態度にて幽界の事情を記せるかを示さんためなり。讀者亦その心して之を見んことを要す。

次に地獄はいかにと云ふに、曰く、

『わがために天界に到る途と、地獄に到る途とを表像(レプレゼント)せられたることあり。一條の廣き路あり、左方即ち北方に赴けり、われは數多の精靈の之を往來せる如きを見る。されど此廣き路の極まる處遙かに大石あり。此石より路二つに分れ、一は左折し、一は之と反對して右折す。左せ

物亦前と同じく光耀陸離たり。ある處には銀の如き樹の葉あり、金の如き果實あり、花壇にある花の色は紅霓の如く見えぬ。望極まる處に疆界あり、疆界の彼方に又、宮殿あり。天界の建築は實に美術其物なりと思はるゝばかり也。されどこは不思議の事にあらず、美術は實に天界より來れぱなり。天人曰ふ、此等と、其外無數の事物の尙一層圓滿なるものと、皆主によりて天人の眼前に現はるれども、天人の之を樂しむはその目にあらずして寧ろその心にあること多しと云ふ。そは彼等は物每にその相應を見ずと云ふことなく、而してその神的事物を見るは此相應に由れぱなり。』

上來の所述は僅かに天界と天人とに關する記事の數節にして、これ

樹あり、田圃あり。天人の團體的生活をなせる處には、其住家互に連接し都會的に排列せり、大道あり、小路あり、廣辻あること、わが地上の市街に異ならず。われは許されて、その道路を徘徊し、四邊を眺め、時にその家屋の中に入りたることありき。こは實にわが醒覺充分なる時の事にして、わが内視は啓け居れり。

『われ天界にてその崇大なること、言語に絶えたるばかりの宮殿を見たることあり。其上方は精金にて造れる如くに光を放ち、其下方は寶石より成れるが如かりき、而してその寶石の中には他に勝れて一層の光耀を放てるもありき。諸房内部の裝飾に至りては、之を記すべき言語なく、又知識あらず。南方に向へる處に樂園あり、此に在る一切の事

が世間の光を以て、天界のに比ぶれば、その日蔭よりも少しく勝れりと云ふを聞きて、われ之を怪みき。されど親しく之を見て以來は、われ自らその證人たるを得るに至れり。その光りの白さ、及びその赫き方は到底言語の盡くし得べき所にあらず。わが天界にて見たる所は皆此光の助けに由るものにして、その分明瞭々たることは此世の事物を見るの比にあらずと知るべし。されど實地經驗の證據を擧ぐるに如くはなし。われ天人と面談したる毎に、われは彼等の住所に在りて彼等と共なりき。其住所なるものは、わが地上の所謂家屋と正に相似たれども、その美しさは遙にこれに優れり。天人の住所には室あり、奥の間あり、寢室ありて、其數頗る多し、又中庭あり、これをめぐりて花園あり、小

『凡そ人愛する處あれば、その所愛は彼に取りて善となるが故に、一切の善は愛より來るとなすを得べし、是を以て天國の善を天的とし、靈國の善を靈的となす。　これによりて、天國と靈國とを區別するは何の點にあるかを明らめ得べし。　即ち是等兩國土の相異は主に對する愛の徳と、隣人に對する仁の徳との相異なるが如し。　而して又主に對する愛の徳は内善にして、主の愛は内愛なるが故に、天國の諸天人は内的なり、之を高處の天人と呼ぶ。

『自然界に依りてのみ思索するものは、天界に光ありと云ふを會得する能はず、されど諸天界には光ありて、其强さ世間日午の光明に優ること數度也。　こは夕暮、夜分と云はず、わが屢〻見たる所なり。　始めは天人

よりも多きことあり。その内分に神性を受くるものの多きを天的天人と云ひ、少きを靈的天人と云ふ。かくて天界を二個の國土に分ちて其一を天國と云ひ他を靈國と云ふ。

『主の神性をその內心に受くること多きが故を以て、天國を構成するに至れる諸天人は、之を呼びて、內的天人、又は高處の天人となし、彼等によりて構成せらるゝ天界を內的天界、又は高處の天界と言ふ。之を呼びて或は高しとなし、或は低しとなすは、內にあるものは高くして外に在るものは低ければなり。在天國の諸天人が居る所の愛を天愛と云ひ、在靈國の諸天人が居る處の愛を靈愛と云ふ。天愛は主に對する愛なり。靈愛は隣人に對する仁なり。

らず。かれが神學上の所說は兎に角、彼が所謂天の使命として人間に傳へんとする所は、靈界の存在なるが故に、予は左に此事に關し、彼が如何なる所說をなしたるかを示すべし。曰く、

『天界の種類は無限にして、各國土必ずしも相同じからず、天人亦各相異れり、故に天界をまづ總體の上より分ち、次に部類に從ひて分ち、又次に之を個々に分つ。總體より天界を分ちて二國土となし、部類に從ひて三種となし、個々に分ちて無數の團結となす。今是等種々の分界につきて說く所あるべし、之を呼びて國土と云ふは、天界を「神の國土」と呼びなすに由るなり。

『天人が主より來る神性をその內部に受くるに當り、一類のものは、他

たるか否かは、わが知る所に非ざれども、その所述、恰も鋭利なるナイフにて心胸を刺すが如し。物學びの人は遂に是れ重荷を負ふ驢馬か。

スヱデンボルグの神夢なるものは皆此の如きものにはあらざれど、今は只其一例にとて、これを擧げたるまでなり。心ある讀者は、此一條の物語りの中に不條理の如くにして條理あり、荒唐無稽の如くして而かも最も常識に富み、人情に合し、日常の經驗と相離れざる處あるを察すべし。ある意味にて言へば、スヱデンボルグは古今獨歩の大批評家なりしとも謂ふべし。

スヱデンボルグを知らんにはまづ彼が「天界と地獄」を知らざるべか

化したるロトの妻の如くならむ。

『かく言ひて、われは別を告げたるに、物學びの人々大に怒り、われに向ひて石を投げたり。そのときの彼等は石像の如くにして人間の理性らしきものを少しも有せざる如くなりき。

『われ天人に向ひて此人々の運命をきゝたるに、天人曰はく、彼等は益々深く地下に降り行き、遂に曠野の中に出でゝ重荷を負はせらるべし。そのとき彼等はまた理性によりて言説するを得ざるが故に、わけもなき饒舌に耽らん、遠くよりこれを見れば、彼等は重荷を負ひ行く驢馬の如し。』

スエデンボルグ、實に靈界における所謂學者なる者の運命を透視し

遠からん。只物事につきて「こうもあるか」と理屈をこねるは、猶帽子や、靴をその身につけることをせずして、その適不適を論ずるに異ならざらんや。斯の如き論議は畢竟何の處に皈着するかと云ふに、何ものの存在もわからぬと云ふことに終る外あらず。救ひと云ふものあるか。死後永遠の生命なるものあるか。甲の宗敎は乙の宗敎よりも有力なるか。また天界あり、地獄あるか、と云ふことにつきて、諸君は何等の所知なくして止まむ。一歩〳〵前方に踏み出すことをせず、初一步の處に止まりて、足の下の砂をのみ踏みしむるうちは、諸君は如上の諸問題につきて何等の思惟をもなすを得じ。諸君もし意を此に留むることをせずば、諸君の心は判斷の能力を失ひて、内より頑(かたく)なになり、鹽の柱と

約か、もし普通一般の人々に對しての制約ならば、宗教そのものは何等一顧の値ひなかるべし。されど賢明なるものに對しても此制約ありとせば、宗教も亦是れ一箇の事項なり。

『この議論をきゝて、われ曰はく、諸君は只物學びと云ふより外に何等の性格の貴ふべきはあらず、そは諸君は只何事に付きても、「こうもあろか」と云ふことのみを考へて、これを兩樣にひねくることを知るに過ぎざればなり。物學びと云ふも、何か慥かに知るところありて、其方面に向ひて人の步み進む如く前進して、遂に能く眞智に達することなくば、物學びも畢意何の益に立つべきか。もし此の如くならずば、諸君は眞理に向ひて爪先をだに觸るゝを得ず、否、これを去ること愈々遠くして

『われ曰ふ、さらばこれを一年のうちに論じ盡くすべきか。

『一人あり、曰く、百年を經るとも之を決すべきにあらず。

『こゝにおいて、われ曰ふ、さらば其間諸君は何等の宗教なしにをるものとすべし。

『その人又曰ふ、とに角、まづわれらが決着すべき事項は、果して宗教なるものこれあるか、もしあるとせば、そのものは吾等の一顧を値するかと云ふに在るべし。　もし果して宗教ありとせば、そのものは亦賢明の人々に對しても存すべきものなり。　もし宗教なるものなしとせば、そは只普通一般の人々にとりてのみ存するものに過ぎざるべし。　さく宗教(レリジョン)とは制約の義なりと、されどその制約なるものは誰に對しての制

三、甲の宗教は乙の宗教よりも有効なりや、否や。第四、天界と云ひ、地獄と云ふものあるか。第五、死後永遠の生命なるものあるか。尚此外數多の問題あり。

『このとき、われは第一項の研究問題、即ち宗教なるものは、果して研究の價値あるものかと云ふことにつき、彼の人達に尋ねたるに、彼等の討究は議論百出と云ふ鹽梅にて、所謂る宗教なるもの果して存するか、もし存すとせば、その宗教なるものは何等考究の價値ありとせんかを論じたり。われのち之を一つの集議となして見んことを望みたるに、彼等はこれを容れ、しかしたるが、その結論に曰はく、此問題は如何にも討議の餘地多くして到底も一夕にてはこれを片付くるを得ずと。

『われ直ちに此人々と語を交へて、曰はく、予はさきに人々が諸君を以て「何たる博學者」と云ふを耳にせり、願はくは諸君と最高學問上の事項につきて聊か論じたし、可なるべきか。

『人々曰く、只君が望む所を言へ、われらは君をして滿足せしめん。

『われそのときに尋ねて曰ふ、人を救ふべき宗教は如何なる特性あるべきか。

『人々曰はく、われらはまづ此問題をいくつかに分割すべし、而してかく分割したる各項につきてそれ〳〵の結論を得るにあらざれば、此問題を答ふるを得ず。第一の研究問題は、宗教と云ふものは果して研究の問題となすに足るものか。第二には救と云ふことありや否や。第

と「こうでもあろうか」と云ひて、これにつきて爭ひをのみ事とすればなり。思索にしてかくの如く一歩をも進むことなきときは、只同一處をのみ踏みたたく如く見え、少しも前進することなきものなりと。

『われそのとき、集りの人々に近寄り見しに、驚くべし、彼等はみな相好卑しからざる人々にしてその衣裳も見事なりき。然るに天人曰はく、かくの如きは只彼等自分の光明に居るときのみ、もし天界の光明此に入り來らば、其相好は變化し、その衣裳も亦今の如くならずと。そのとき天界の光明輝きわたりたるにより、われ、これにて彼等の面貌を見れば、暗憺としてその着物は黑色の粗衣に過ぎざりき。然るに此光明をひき去るときは、彼等はまた舊の如く見えき。

りと。

『われこれをきゝ、天人にその學者なる人々の中にわれを導かんことを願ひたるに、天人は乃ちわれを一つの洞穴中に誘ひ、それより尚數步の段を下りて下層の地中に入れたり。「何たる博學ぞ」と云ふ小聲をたどりて、下方に降り行けば、見よ、此處に數百の人々ありて一つ處に立ち、其足にて地を擊てり。われ之を見てまづ驚く。よりて何が故に彼等は此の如くに起ち、その足の底にて、地面を擊つかと尋ねて、曰はく、かくして彼等はその足を以て地上に穴を穿つに至らんと。

『天人之をきゝ、微笑して、曰く、彼等が此の如く一つ處に立ちて地を擊つ如く見ゆるは、彼等は何事につきても「こうてある」と思ふことなく、た

ぎ去る風の如し、また髓なき樹の皮の如し、核子なき杏の實の皮の如し、肉なき果實の皮の如し。そは彼等の胸には心となるべき判斷力なくして、その心を只外界より來る感覺に結びつくればなり。故に外來の感覺そのものが決定しをらざるときは、何事につきても判斷を下すを得ず。一言にて曰へば、彼等は只外感的なるにすぎず、われらは之を呼びて理屈言ひと云ふ。その理屈言ひなる所以は、彼等は何事にまれ、きく所あれば、之を取りて論爭の主題となし、何等の結論に達することなく、矛盾と衝突とを繰返して止むべきが故なり。彼等が最も好む所は眞理そのものを捕へて討論の材料となし、之を辨難し、之を粉碎するに在り。世に在りてわれほど博學なるはあらずと信ずるは實に彼等な

節をも參看せよ。）左に之をスヱデンボルグの言葉のまゝに記載せん。

『その後、われはまた下層の地中よりして、さきに一たび聞きたる聲を再び聞けり、曰く、「何たる博學の人だちよ」曰く、「何と賢しき人々よ」と。われはあたりを見廻して、如何なる天人か此處にあると思ひたるに、ここにありし天人は、今「何たる博學の人だちよ」と叫べる人々の上方に當る天界にをる處の天人なりき。

『かくてわれは此天人だちと、今耳にしたる叫び聲につきて物語りしたるに、天人だちは曰はく、この博學なる人々は物事を「こうでもあろか」、「こうでもあるまいか」とのみ論ふことを知りて、「こうである」と思ふこと極めて稀なる人々なり。故に彼等はさつと吹き來りて跡方もなく過

れら皆必ずしも之を覺知するを得るものにあらざるべけれど、呼吸の調整は心身の修養に餘程の關係あるは疑ふべからざるに似たり。スエデンボルグが殆んど生來これを感ずるを得たるは、かれが晩年の使命に對して何等かの意味あるものかも知るべからず。

スエデンボルグが靈界に至りて見聞したる事物は如何なるものなりしかと云ふは、讀者の知らんと欲するところならん。こは「天界と地獄」を始め同氏の著書を見れば、處々にこれを見出し得べからんが、今左に一二の實例を掲ぐべし。第一は「夫婦の愛」と云へる書の第二百三十一節に記せる「記憶すべき事項」の第二なり。（又「基督眞敎」第三百三十三

て深く思を潛めたるときに此呼吸に觸れたり。それよりして、われは數年にわたりて人には殆んど自覺し難きほど寂然たる呼吸の存するものあることを悟れり。この事につき、われはまたその後、言説し、思惟するを得るに至れり。此の如く、予は幼時より、殊に沈思冥想によりて、外的呼吸を止息し、内的呼吸のみを働かすことを得たるが、實際眞理につきて何か深く考へんとするには、是非此の如くならざれば、之を能くし難きなり。その後、わがために天界開けて精靈と相知るを得るに及び、われは主によりて全く此呼吸を得るに至りぬ。一時間も此呼吸の中に住ひたることありきと。

呼吸に内外の差ありと云ふことは、スヱデンボルグの實驗にして、わ

別ありて、外的呼吸は塵界より來り、內的呼吸は靈界よりす。人死するときは、外的呼吸息む、されど寂靜無聲の內的呼吸は綿々として絕ゆることあらず。人の內的呼吸は尙肉體的存在を繼けつゝあるうちは、寂然として之を感ずること難し。此呼吸は全くわが靈の上に備はれる信眞の裡より出で來るものにして、靈の生命なり。靈界と感應するを得るは此呼吸あるに由る。

此呼吸につきて、スエデンボルグは自己の經驗を語りて曰ふ、わが始めて內的呼吸を感ずるに至れるは、幼時のことにして、朝夕默禱を捧ぐるときこれを得たり、その後亦心臟と肺臟との聯關的作用を研究するときにも亦これを覺えたることありき、殊に哲理上の著述をなさんと

第六　所見、所言一般

スエデンボルグが天界に到り、地獄を廻りたりと云ふ實驗は、果して主なる神の密意によりたるものか、否かを論ずるは本書の目的にあらざれば、そはともあれ角として、氏が此種の實驗は其呼吸と大に關係せるものに似たり。而して彼自らも呼吸術につきては深く研究したる所あり。所謂相應（コレスポンデンス）の說に由れば、人體の上より見たる肺臟は人の智性に相應し、その心臟は愛と相應せり。而して智と愛との靈的關係は、やがて肺と心との間における關係なり。一を知ればまた他を推し得べし。故に呼吸を調節するは、智性を向上せしむる所以なり。呼吸に內外の

第六　所見所言一般

と迫ること屢なりき。ス翁遂に之を諾す。のち此小娘をわが花園の小亭に導き入れ、これを幕の前に坐わらせ、「天人、今將に汝の面前に現はるべし」と曰ひつゝ、その幕をひきあげたるに、その後に一臺の鏡面あり、而して小娘は、わが面のこゝに映れるを見たりと云ふ。

題の下に倫敦又はアムステルダム發行と記しおかば、該書の發行を巴里にて許すべしとの事なりき。されどスエデンボルグは斯る小事にも世を欺くを好まず、之をアムステルダムに持ち行き、そこにて剞劂に附したり。

最後に彼が性行の一方面を窺ふべき佳話一條を擧げんに、瑞典の歷史家にマンデルス・フリクセルと云ふあり、その人の傳ふる所に曰ふ、わが祖母なる人は、尙十五六歲の小娘の頃、スエデンボルグの住處より程遠からぬ處に、その父と共に住ひけるが、スエデンボルグとの交際親しかりき。娘なるわが祖母は幼時の好奇心に驅られ「伯父さん」のス翁に向ひて、その所謂る精靈なるもの、天人なるものを一たび見せしめよ

されば スエデンボルグの仕事は粗莽亂雜なりしかと云ふに、決して然らず、その緊切なるものに至りては、稿を更ふること數たび、また其成績にあきたらざるものは之を棄て去りて復た顧みず。 老後に至り、旅行に生を送ること多かりし故か、寧ろその必要なかりしによるものならん、彼は著述の參考書となるべきものは一册もこれを携帶せず、僅かに希伯來語の聖典一部を以てその書齋となしたり。

スエデンボルグが宗教上の書物は英國と和蘭とにて出版せられ、本國にて公にせられたるはあらず。 その故は當時宗教上の自由は此兩國においてのみ得べかりしによる。 始め「基督眞教」を巴里にて印行せんと思ひ、これを出版物取調所に願ひ出でたるに、もし「いつもの如く」表

格言を殘したるかを察し得べし。

ペルネティイ僧正の言に曰はく、スエデンボルグは精勵倦むを知らざる著者にして日夜文筆に從事したりと。クノートの記錄を見るに、曰く、「彼の新著書に從事するや、殆んど人間以上と思はるゝ程の努力なり。此書の活字は以前のものよりも小なるに、既に印刷せられたるもの十六全紙あり、而して此印刷物に對して準備すべき原稿は一枚の印刷に四枚の割合なり。彼は當時每週全紙二枚づゝ印行し、自ら之を校正したり、かくて彼は每週全紙八枚づゝの原稿を認むべきわけなりき」と。スエデンボルグ此時八十三歳に足らざること三日なりき。精勵の程想ひ見るべし。

ざりし所、著述全體の品質はこれが爲に毫も損する所あらず。その義兄なるベンゼリアス僧正がスエデンボルグを以て時間の大經濟家となせるは誠に故あり、此の如くならざれば決して斯の如き質と量とに富める著作を成すを得ず。

更に驚くべきは、此の如き著述は何れも彼自ら執筆せるものにして一人の秘書又は筆記生なるものを用ゐざるにあり。而して各書冊の順序整然として一絲亂れず、彼は始めより一種の索引を製しおきたるが故に、次を逐ひて書を著はすに當り、既刊の分に對して、みなそれ〴〵の照應、引證を誤らず、よく系統を存するを得たり。此索引そのものが亦一卷の大著にして、之を見るものはスエデンボルグが如何に多くの

を要求せらるゝ時は、これをわが錢入の在るところへやりて、勝手にその金高だけを取り去らしめたり。その他、彼と金錢上の關係ありしものは、何れも彼が寛大なるを言はざるはなし。

スヱデンボルグが六十三年間の著述は驚くべき程多量なり、之を八折本にして毎冊五百頁とせば六十卷餘となるべし。而もこは彼が著述の全部にはあらず、尙出版に付せられずして原稿のまゝなるもの、ストックホルムの國立圖書館に保存せられ、學者の研究を待つもの少きにあらず。而して此等の著述は何れも甚深なる思想を論ぜるものにして一夜漬の產物にはあらず。固より處々に同一事を繰り返したる如きところあれども、そは彼が天啓の使命を遂ぐるに當りて止むを得

こととなすべし。

彼はまた貸金を好まず、施しを嫌ひたり。曰く、世の所謂物貰ひなるものは、大抵怠けものにあらざれば、悪漢なり、たとひ憐むべきものあらんも、之を検査することなくして濫りに與ふるは、却てその人を損ふ所以たりと。確論となすべし。今日の慈善事業は此原理を基とし、私施をとらず、また只金錢物品を與ふることをせざるなり。

貸金のことにつきては、彼は思へらく、金を貸すはこれ金を失ふ所以なりと。その上、彼はその旅行と出版とに收入の全部を要するの故を以て、他人に金を融通したることなかりき、また他より借金したることもあらず。されば金錢の勘定に細かきかと云ふに、室主より家賃など

からざる以前に當り、彼は三四週間ほど、此の如き冥想に沈み、何等の營養をとらざりしが、その後起き出づるに及びてまたもとのスエデンボルグなりきとぞ。此の如き場合には、彼は人を近づけず、自然に自ら起き出づべき時あらんと云へり、また此の如き眠より醒むるときは、彼は直ちに室内の火を起して筆をとることもありき。

彼が金錢に對して淡泊なりしは、著しかりし事實なり。瑞典政府よりの恩給に加ふるに多少の私有財産ありて、これよりする利息を、生活・旅行・出版の費用に充てたり。既に此の如き歳入ありしが故に、出版の利益を收めんともせず、また他に利殖の道を計らんともせず、此點に於ては彼は極めて獨立なるを得たり。スエデンボルグの爲に喜ふべき

その心全くおのが天職の上に集中したりしものか、外出のときもその着物に何か變な處ありて、之を直してくれる人なければ、その儘にて衆人の中に出入したりと云ふ。或時他の招待に應じて出て行きしが、ちがつた靴留の靴を片々づゝ穿ちて、その家に到り、若き娘共の笑ひ草となりたることなどありしとぞ。

スエデンボルグ、愈老ゆるに至りては月日晝夜など云ふことを全く自覺せず、只管その著述に務めたり。眠氣を催せば、床に就くべしと曰ひて、更に一定の時を限らず。あるときは十三時間も一眠りに眠りて起き來らず。また一種の冥想に入るときは、數日間も寢所に臥したるまゝ、食事さへせず、その儘に動かざることあり。死期を去ること久し

に至れり。人間に此性質あるうちは肉食も亦已むを得ざるべきか、云々。肉食と清き高き思想とは相容れざるに似たり。

スヱデンボルグの着物は極めて簡單なるものにて、何等の人目をひくべき裝飾なく、誠に彼の如き人格に相應したるものなりしと云ふ。外に出づる時は、時の風俗に倣ひて鬘を被りたるも、餘り長くはあらざりき。腰には妙な鞘の劍を横たへ、手には銅に金鍍金の頭ある杖を携へ、足には何か寶石を鏤めたる金銀の飾りある靴留づきの短靴を穿てりとのことなり。金銀と云ひ、寶石と云へば、何か業々しき飾りのやうに思はるれども、その頃のスヱデンボルグの位地に在る人にしては、何等別に目立ちたるものにはあらざりしならん。而も晩年に至りては、

佛僧によりて支那より輸入せられ、その後、佛家と茶とは、特種の因緣を結ぶやうになれり。

スエデンボルグは大に嗅煙草を好みたるものゝ如し。今日殘れる氏の稿本の間に尙その粉あり、餘臭を存す。而して不思議にも、これが爲め彼の原稿は紙魚などの害を免かれたるなり。

彼は菜食家と云ふ程にはあらざりしも、肉食に對しては余り其嗜好なく、また此を以て天道と相容れざらんとする傾きあるを認めたるものゝ如し。曰く、「極めて太古の人は肉食せざりき、動物を殺すを以て殘酷の事となしたり。然るに其後、世が末になり、人々の心殘忍酷薄となるに及びて、生物を屠るを何とも思はざるやうになり、その肉をも食ふ

あり。實に飽食と精神修養とは兩立せざるに似たり。さればスヱデンボルグも常に肉體の慾にその心を奪はるゝを戒しめ、美食を貪るものゝ毛孔よりは惡氣立ち上り、此氣結びて蛆虫となり、その室に充つべしとなせり。彼が始めて靈的實驗を得たるほどの頃は、食物の品質、常人のものと異らず、只少量なりしと云ふに過ぎざりしが、その晩年十五年の間は殆んど肉食をなさず、僅かに時々魚類、殊に鰻を食したるのみ。主食はパン、バター、牛乳、珈琲、杏實、乾葡萄、野菜、ビスキット、ケーキ、ジンジヤ・ブレッドに止まりき。甘きものはこれを小兒に分ち與ふるを常としたり。彼はまた能く水を飲み、殊に珈琲を好みたり。珈琲と哲學者とは餘程密接なる關係あるものと見ゆ。我日本などにても茶は始め

供は亦わが親に優りて彼を愛するが故なり。思ふに此人は富める人ならんか」と。此時スエデンボルグ年既に八十を超えたり。

七十、八十の老翁でありながら、瑞典より和蘭にわたり、英吉利に赴くときなども毎に一人旅にして、何等の付添人を連れたることあらず。その頃は今日と違ひ、汽車、汽船の便あるにあらず、英吉利より和蘭にわたるにも順風に帆を上げて尚一週間以上を費したる程なれば、行路難は到る處に歌はれたるならん。然るに此矍鑠たる老仙は飄然として彼港より此港に渡り、天命を受けたりと信ずる著述をなし、これを出版するの外、餘念なかりしなり。

ミルトンの言に、「神々と聖餐を共にせんため、須く其食を節すべし」と

の小供ありき。われ嘗て其家の女主人に向ひスヱテンボルグに對する世話燒ぶりを尋ねたるに、女主人曰ふ、世話など云ふことなし、下男のなすべき仕事は朝、爐に火をおこす外あらず。彼は每夕七時に就寢し、朝八時に起床す。吾等は此人に對して別に勞を取ることなし、日中は彼自ら火を焚き、寢る頃になれば、頗る注意して、火の始末をなすを忘れず。着物をきたり、脫したりするにも、人手を煩はすことなし。その外何事にても身のまわりは自ら處理するを常とするが故に、此人の在不在は吾等の關知せざる程なり。われは此人の一生茲に暮さんことを願ふ、此人去る時は兒供等の失望ほど大なるはなかるべし。そは外出のたびに彼は何か小兒の爲にとて菓子を買ひ求め來らざるはなく、兒

なりし人は未だ曾て之を知らず。彼はいつも自ら足ることを知りて、憤らず、またあへぐことをせず。彼は眞の哲學者にして、また實に哲學者の如き生涯を送りたり。勉むるときは勞を厭はず、起居質素なりしも倹に失することあらず。何事につけても健全なる考を有し、その說をなすこと澁晦ならず。彼は大に世の哲學者なるものを斥けたり。彼は誠實・有德・敬虔の典型、而してわが見る處にては、吾國中、氏の如き深遠なる學問を有するものはこれあらず、云々。

ス氏生活の模樣は極めて質素にして、彼が本職とする處と相稱へり。アムステルダムに於けるときの生活につき、クノー曰ふ「彼はハンケチ、小切れなどを賣れる商人の處にその寓を定めたるが、その家には多く

して小兒の物言ふ如く、語り出すときは、惡罵の聽衆も自ら靜まりかへり、只口を開きてこれを傾聽する外なかりき。スエデンボルグの眼には何人をも沈默せしむるだけの魔力ありしに似たり」と。

既に天界と地獄とを遍歷し、主なる神より直接の使命を受けたりなど云へば、傲然として自ら持すること極めて高くなるか、或は偏狹にして圭角多く、人と相容れざらんとするが、普通の人情なるに、スエデンボルグは全く之に反して何事につけ小兒らしく、無邪氣に、また超然として脫塵の仙人風ありき。

ヘプケン伯曰はく「予は彼を知ること四十五年に及び、またその後、彼と會見すること每日なることもありしが、彼の如くに終始渝らず、有德

アムステルダム市のクノーと云へるはスエデンボルグ晩年の友人にして、彼が崇拜者にはあらざれども、能く其人物に服したる人なるが、スエデンボルグに關して極めて興味ある記錄を殘したり。その中に云ふ、「彼は予と對話するときいつもその青き眼元に微笑を含みて予を見つめたるが、その眼の中よりは眞理そのもの丶言葉が輝き出づる如く思はれたり」と。この眼に向ひては、スエデンボルグの嘲笑者も自ら畏敬の念を生じたるもの丶如し。クノー又曰はく、「予はスエデンボルグと共に屢、多人數の中に出入したるが、その中には彼を以て嘲笑の目的物となさんとしたるもの少なからざりき。然るにスエデンボルグ一度口を開きて、靈界の事情を、何等の腹藏なく、何等の躊躇なく、循々と

第五　人物、生涯

スエデンボルグの相好につきては、確かなる記錄の徵すべきものなし、されば其の人相の如何なるものなりしかは僅かに彼が畫像によりて知るの外之れあらず、而して其の畫像も余り上乘のものは多からざりしに似たり。本書の卷頭に揭ぐるものは、スエデンボルグの親友たりしヘプケン伯爵が描かせたるものにして、原畫はグリプスホルムの國立美術館にあり。一見して其の容貌の如何にも智力に富み、而も意志固く、思慮深きを感ずべし。殊に其眼光には一種の權威あり、魔力ありて尋常一樣のものならざりしを見る。

第五　人物と生涯

の手紙によれば、火災はスエデンボルグの言へる所に違はず起れるなり。火曜の朝、王室よりの使者、知事の許に來り、火災の悲報を齎らし、それが爲め生じたる損害及び破壞倒覆せられたる家屋のことなどを記せるが、其當時スエデンボルグの報告せる處と寸分も違ふ所なかりき、而して火は實に八時を以て鎭靜に歸したるなり、云々。

尙此外にスエデンボルグに一隻の靈眼ありし事實を證すべきもの數條あれども、此の如きは彼が本色を增減するものにあらざれば、今くだくだしく之を述べず。只彼に此の如きことありきと記すだけに止めんと欲す。

と三軒目の處にて鎭靜せり」と。この報道はゴッテンブルグの全市に大恐慌を生じたるが、殊にその座中に連れる人々を驚かすこと一方ならざりき。その夜これを知事に報じたるが、翌朝に至り知事はスエデンボルグを呼びて、此火災の事につき、尋ぬる所あり。彼即ち其如何にして起り、如何にして鎭まり、且つ何時間燃えたるかを詳しく告げたり。その日此報全市に擴がり、殊に知事はスエデンボルグの言を以て、耳を傾くべき價あるものとなしたり。故にその恐慌は非常なりき。何となれば該市における知人及び財產の或は此禍に罹りたらんかを恐るゝもの多かりければなり。月曜の夕方に至り、一人の使ひゴッテンブルグに來る、こは火災中に商業會議所より發せられたるものにして、そ

誤)九月(七月の誤)の末つ方、土曜の午後四時にスヱデンボルグは英國よりゴッテンブルグに到着したるが、その時ウヰリアム・カステル氏は彼を其家に招きたり、尙外に十五六人の客ありき。六時頃スヱデンボルグは外に出でたるが、その歸り來りし時の面を見るに、蒼白にして、愕ける色あり。彼曰はく、ストックホルム市の南區(ゴッテンブルグを去ること三百英哩ばかり)に今や危險なる火災起り、極めて迅速に擴がり行けりと。スヱデンボルグは心落付かず、外面に出づること屢〻なりき。又曰はく、彼れが一知人(彼このときその人の名を擧ぐ)の家は旣に灰燼に歸し、自家も亦將に危からんとすと。八時また外より歸り來りて、喜ばしく叫びて曰ふ「有り難きことには、火災今や熄めり、わが家を去るこ

心を喜ばすはわが使命の大目的をわするゝもの、天意は此にあらずと。

スエデンボルグの自任よりすれば、固より斯くあるべきことなるが、今一般讀者の眼より見れば、彼に千里眼的能力ありしと云ふ事實を知らんとの希望自ら起るべし。よりて左に最も的確にして疑の餘地を容れざる一例を擧ぐべし。これはカントが(彼はスエデンボルグと同時代なりき)心理學の研究にとて手を盡して調べたる所に係るものとす。

一千七百五十八年(實は六十八年の誤りなり)八月十日付の書にて、カントはシャルロット・フォン・クノブロッホ孃に報じて曰はく、スエデンボルグが異常の能力を有することにつきては次の事實、頗る有力なる證據なり、最早疑を容るゝの餘地なし。一千七百五十六年(五十九年の

りし事是なり。スエデンボルグにして、もし此神力を利用して富と名とを得んと欲せば、その意の儘なりしならん。而して彼に實に此の如き不思議の神通ありしは否み難き事實なりしに似たり。されど彼はその崇高なる天職を果さんが爲に斯かる卑俗の力を他に誇示せんとはせざりき。故に人の來りて彼に其力を現はさんことを乞ふものありしも容易に之を容れず、曰く、幽界との交感は只主なる神の許し給ふ所にして、非常の事に非ざれば、此交感を得べからず、幽明途を異にするは深き神慮の存する所なれば、凡人の力を以て濫りに之を度るべからずと。又曰く、わが靈界との交通を許されたるは、神が特にわれに命ずる處ありたるよりのことにて、此間に何等の怪奇あらず、徒らに俗人の

第四　一隻の靈眼

近頃日本にても千里眼とか、透視とか云ひて、此方面における心理學の研究やかましからざるに非ざるが、スヱデンボルグの如きは實に此研究に好材料を供するものと謂つて可ならん。天界と云ひ、地獄と云ふものを親しく經歷して、その成り立ち、そこに住まへる天人・精靈・惡魔などのことを手にとる如く記述することだけにても、彼は心理學の方面より見て充分に取調を要する人物なるが、これは亦その外に、宗敎上・哲學上の關係もあることなれば、別問題として此に彼が特に心理學者の攻究の好題目となるは、彼に千里眼的能力あり、また過去を見るの力あ

第四 靈眼

王は、同國立學士院の希望を容れ、スヱデンボルグの遺骸を本國に移す
に決し、之を同國の軍艦に載せて、ウプサラの大寺に改葬す、而して國會
は彼を永遠に紀念せん爲め、大碑石を建てたり。ウプサラの大寺は英
吉利のウエストミンスターに相應するものにして、玆には其國の大人
物を葬る處とす。

を辭する時も實にわざ〳〵倫敦に來りたるが如き觀ありき。彼が最後に渡英したるは、千七百七十三年の夏にして、「基督眞敎」をアムステルダムにて出版したる後なり、而して翌年の春三月、倫敦の客舍にて此世の形骸を捨てたり。彼は其死を前知して、之を主婦及び婢女に告げ、其期の迫るを見ては、恰も御祭りか、遊びにでも出かけんとする兒供の如くに喜びたりと云ふ。八十四歲の老翁、その生時、旣に他界の模樣を目睹し、自ら去りて往くべき處の何れにあるを熟知したる彼、愈〻自らその境に入るべきを知るに及びては、何としてこれを喜ばざるを得べきか。

遺骸は倫敦における瑞典の敎會に屬せる墓場に埋葬したるが、その後百三十六年を經て、卽ち一千九百八年、(當時予は英國に在りき、)瑞典國

六年「默示錄示現」を發行するに至りて、此の實驗を逐次の著書中に「記憶すべき記事」として挿入したるが、それ以前は悉く之を例の覺帳中に收めあり、尙一般讀者の眼に觸れざるもの頗る多し。此の如き原稿は一々之を寫眞石版にして原文(羅甸文)のまゝに保存しあり。これを見るに原稿は二枚折字體極めて小、而も整然として頗る見事なり。七十、八十の老人が毎日せつせとして此の如き著述に從事し、之を出版せんがため、故國を出でゝ、和蘭に行き、英國に渡りて寧日を知らざりしさま、これを想ひやれば、今日のなまけ學者をして、穴に入りたき心地せしむ。

スエデンボルグと英國とは餘程深き因緣ありしものと見え、彼が遊學のため、出版のため、前後英國に來りたること兩三回に止まらず、此世

組織的に說述せるもの。まづ絕對的實在を論じ、それより救主の說を述べ、聖靈・三位の神格・聖典・十誡の外義と內義・信・愛・自由決意・悔改・改心・復活・負罪・洗禮・聖餐・教會の終期・主の來降・新しき天界・新教會につき、章を重ぬること十四節を改むること八百五十一、厖然たる大册子なり。

この書を最後の出版として、スエデンボルグはその翌年一千七百七十二年、三月二十九日、(日曜、)八十四歲を以て此世の終りを倫敦の客舍に告ぐ。

以上諸著作の外にスエデンボルグが原稿の儘に殘したるもの少なからず。殊にその靈的實驗の折々これを「記憶帳(メモラビリア)」なるものに留めおきたるが、一千七百四十七年に始りて、最後の年に及べり。一千七百六十

のなり。その濁れるは外に現はれたる兩性の結合にして、これに樣々の變態あり。本書部を分つこと二、節を重ぬること五百卅五。(四折本、三百二十八頁、アムステルダム出版。)

一千七百六十九年、「新教會教說概略（ゼ、ドクトリン、オヴ、ゼ、ニユー、チャーチ）」出づ、こはスヱデンボルグが唱道したる新教會の教說を簡單に述べたるもの、默示錄中における「新しきエルサレム」の義を闡明す。(四折本、六十七頁、アムステルダム出版。)

同じ年、倫敦にて「心靈と身體との間に於ける交涉（ゼ、インターコルス、オフ、ゼ、ソール、エンド、ゼ、ボディ）」なる小冊子公けにせらる。

一千七百七十一年、スヱデンボルグ、八十三歳にして、最後の著述を公にす、これを「基督眞教（ゼ、ツルー、クリスチャン、レリジオン）」と云ふ。スヱデンボルグが一代の神學を

一千七百六十六年、スエデンボルグ七十八歳の老齢に達す「默示錄示現（アポキャリップス、レヴールド）」此時出づ、これ默示錄の寓意を顯示したるものなり。元來此一書は約翰（ヨハネ）の所述なりと傳へられ、彼が神夢中に感じたるところを記せるものにして、其言ふところ奇怪變幻をきわめ、讀むものをしてその意の何處にあるかを迷はしむ。スエデンボルグの此著は即ちその靈的意義を天人より傳へたる儘に記錄したるものとす。（四折本、六百二十九頁、アムステルダム出版。）

一千七百六十八年「夫婦の愛（コンジユジアル、ラヴ）」と云ふ書出づ。スエデンボルグ此時歳八十。こは兩性の愛に清濁あることを說き、その清なるは心の愛より出で丶兩性を結びつくるもの、即ち夫の智性と妻の愛情と和合せるも

す。救濟は漸を以て來る、神よりおちき〳〵の惠みによりて、頓みに救濟の實學がることとなし、是れ神慮にそむけばなり。信だけにては不可なり、之に添ふ所の行あり、愛ありて、始めて救濟の實を結ぶと知るべし。一生を通じて罪惡を犯しながら、臨終の際に、「願くは、神よ、われを救へ」と云ひたりとも、これにて年來の汚垢を一洗するわけに行かず、必ずや始めより懺悔の心を存し、己が罪業を知り、善行をつみ、智と愛と相應せんを要す。大往生は此の如くにして成るものとす。これを「神慮」一篇の大綱となす。

此書の和譯亦既に成る、「神愛と神智」とに次ぎて出版せらるべし、ス氏研究者は必す之を讀まんことを要す。

爲め、假りにその横行を許すものとす、是神慮なり。神慮は善人の上にも、惡人の上にも現はれずと云ふことなし。神慮は常に人を天界に招き入らしめんとす、之に應じて善をなすは其人の自由力により、又之に應ぜずして、惡をなすはこれ亦その人の自由力なり。而して此自由力を惡用するは我(プロプリアム)を執ずるより起る。人には各救はるべき素質あり、力量あり、而してその救はれずして墮落するは自ら救はざるによる。救はるゝの道は諸惡を以て神慮に對する罪業と觀じ、之を避けて爲さゞるにあり。即ち茲に一惡ありとせよ、度々之を行ふは、これ則ち神慮を犯すなり、只惡を遂げたると云ふに止らず、此に大に宗教的意義あることを覺悟し、つとめて之を避け、善にのみこれ赴くを救濟の最捷徑とな

のみ。此處にスヱデンボルグが必至論と自由意志論とを巧みに調和せんとするを見るべし。

次ぎにスヱデンボルグが此書にて論ずるところは智解（アンダースタンディング）と意志（ウキル）との關係なり。曰はく、智解だけにて意志に入らざるものは、水泡の如く、わが心の表面に止まりてその内奥に入らざるが故に、行爲となりて現はるゝことなし。如何に智解を進めても、情緒の之に伴ふことなければ、その智解却て其人の精神的發達を害ふが故に、人は先づその情の淨く、その意の善ならんことを求むべし。

次には惡と僞との何故に世に行はるゝかを說く。こは佛教の方便說に似たる處あり、即ち惡と僞とは善と眞とをして之に克たしめんが

を除き、その善を奬め、何もかも自己の力に由らざるはなきが如く思はる。されどその實、此の如きは皆神力に由らずと云ふことなく、只神慮の深きが故に人之を悟らざるなり。神慮は外よりして人心を牽制することを願はず、また牽制の自覺を有するを欲せず。されど神は吾人のよく神慮の事實なることを認めんことを願ふ。此事實は普遍にして到らざる所なければなり。故に人の計らひなるものあることなし、賽の目の一が出て、六が出るも皆悉く神慮の致す處とす。神慮は永遠に涉りてすべてのことを未然に定め置けり。されど人は之を知ることを得ず、神慮の秘機は凡人の窺ひ知る處にあらず。只人はその理性の力を盡くし、その自由の力を働かして、而して其餘は天道の働に任ずべき

一千七百六十四年、スヱデンボルグ七十六歳のとき「神慮論（ディヴァイン、プロヴィデンス）」出づ、是亦彼が哲學的神學上の著述にして、さきの「神智及び神愛」と同じく大切なる書なり。アムステルダムにて出版せらる、四折本、二百十四頁、章を別つこと十八、節を分つこと三百四十。

一篇の大綱に曰はく、宇宙は神愛と神智とを基としたる神慮によりて統治せらるゝものにして、その終局（エンド）は人類よりして天界を組織せんとするにあり。神慮に關する諸法則を述ぶるに際して、スヱデンボルグは自由意思論に説き及ぶ、曰く、神慮は人をしてその理性の力によりて、自由に意志を行動せしむるものとす、故に人間の立脚地より見れば、自らは何等の制肘を受けず、支配を受けず、衝動を受けずして、自ら其惡

と愛との關係を身體の上に見る時は、意志は心臟なり、智性は肺なり、肺と心臟とによりて人體の支持せらること、猶ほ意志と智性とによりて人の心なるものの存在するが如し。（此に於てスエデンボルグに呼吸の說あり、呼吸の調節と精神の活動とは餘程密接なる關係あるものに似たり。　別に彼が實驗上の話を參考せよ。）而して兩者の關係につきて、その說く處、頗る詳なり、遂に率ひて信（フエース）と行（チヤリテイ）との關係に及ぶ。　此書和譯成る、刊行の日遠からざるべし。

「主」、「聖典」、「生命」及び「信仰」の四ヶ條につきて、スエデンボルグ一派の新說を別々に說けるもの、前書と同年、一千七百六十三年に出版せらる。（此四冊合せての頁數、四折本、百七十七、アムステルダム出版。）

第四章には、永遠の神は宇宙と萬物とを自分より造り出し、無よりは造らざりしことを說き、此創造の眞意は萬物をして各その用(ユース)を遂げしめんとするにあると云ひ、進んで萬物とは用そのものなりと斷ず。スエデンボルグの用哲學には傾聽すべき處少なからず。

第五章は心理學なり、スエデンボルグによれば、人心は意志(ウキル)と智性(アンダスタンディング)とよりなる。意志は神愛を受け、智性は神智を受く、此兩者を人の生命(ライフ)となす、生命はその源頭(フホルスト、プリンシプルス)に於ては腦にあり、その分流(デリヴアティヴス)に於ては身體にあり、此源頭によりて生命分流に傳はり、此分流によりて生命、源頭に集る。而して人はその愛如何によりて、その智性の性質定まり、從ひてその人格定まる。即ち人はその愛なり。相應(コレスポンデンス)の理によりて智

り。靈界に在りては神性は太陽として現はる、その熱は愛なり、その光は智なり。わが地上の太陽は此靈的太陽によりてその活熱と活光とを得、萬物を生じ、且つ之を成育する力あり。宇宙創造の目的(エンド)は森羅萬象をして、その元始たる創造主、即ち神性に還らしめ、これと彼との間に相應(コレスポンデンス)、互入(コンジヤンクション)あらしめんとするに在り。

第三章は度(ディグリイ)の説なり、こはスエデンボルグ獨得の哲理にして、氏はこれを以て萬物の列序(オーダー)、及び心靈の進歩を説く。度に橫(シヨルテーニヤス)、竪(サクセツシーヴ)あり、斷(ディスクリート)、連(コンテイニユアス)あり、橫度、竪度亦各三級に分る。スエデンボルグの神學を解せんには度の説を會せんこと必要なり。次に人心に理性力(ラシヨナリテイ)と自由力(フリイダム)とあるを説き、惡は此兩力を害用するに始まることを云ふ。

一千七百六十三年（スエデンボルグ七十五歳）に、「神愛と神智」（ディヴァイン、ラヴ、エンド、ディヴァイン、ウヰズダム）出づ。これは彼が哲學的神學の著述にして上來の記述的諸書と異れり。まづ神性は愛と智より成ることを說き、これを基礎としてその神學の綱領を定む。此書はスエデンボルグを研究するには極めて大切なる書物なるが故に、その大要を玆に揭ぐべし。全書、五章より成り、節を分つこと四百卅二、四折本にして百五十一頁、アムステルダムにて出版す。

卷首先づ人間の生命は愛にあることを說き、而して其愛は神に外ならず、故に神は人の生命なること、人は此生命の所受者（レシピエント）なることを云ふ。また神性に性と相（エッセ、エキジステレ）との差別あり、兩者二にして而も一、愛は性なり、智は相なり、愛は智よりし、智は愛よりす。　神性は之を合せて成れるものな

にて見聞したる所となす。新しきエルサレムのことは默示錄第二十一章の始めに在り、また新らしき天地のことも此書に解說す。(原版、四折本、百五十六頁、倫敦出版。)

此書和譯亦成る、出版の期遠からざるべし。スエデンボルグ神學の大綱をその全體に涉りて知らんと欲するものゝ一讀を要するところ。曰く、善と眞。意志と智性。內人と外人。愛。自愛と世間愛。隣人に對する愛。信。敬虔。良心。自由。功德。悔改と赦罪。再生。誘惑。洗禮。聖餐。復活。天界と地獄。敎會。聖典。神慮。主。敎會制度と政府。以上列擧の諸項を極めて簡潔に說述したるを此書の特色とす。

「最終の審判と巴比倫の滅亡」（ゼ、ラスト、ジャッジメント、エンド、ゼ、デストラックション、オブ、バビロン）、これは新約聖書中、默示錄における豫言の悉くスヱデンボルグの生時に遂行せられたることを記す。（原版、四折本、五十五頁、倫敦發行。）

「白馬」（ホワイト、ホルス）の說。これは默示錄、第十九章中に記する「白馬」につき、その文字とその靈的意義とを具さに說きたるもの、「天道密意」（ヘヴンレイ、アルケイナ）の拔書きなり。（原版、四折本、二十三頁、倫敦發行。）

「わが大陽系及び諸星界に於ける諸地球」は、諸世界の模樣、その處に住める人類・精靈・天人の事を記せり。（原版、四折本、七十二頁、倫敦出版。）

「新らしきエルサレムとその天的敎說」（ヘヴンレイ、ドクトリン）は・スヱデンボルグが神學上の所見にして、スヱデンボルグ敎會の信仰個條をときたるもの、彼が天界

べければ、讀者はこれによりて多少著書の本懐に接得することあらん。但此に一言したしと思ふは、スエデンボルグが「天界と地獄」中に千古不磨の一格言を道破したること是なり。その格言に曰はく、人とはその意志なり即ちその愛なりと。(Voluntas aut amor sit ipse homo.) 尙詳言すれば、第四百七十四節の大意に曰はく、人をして人たらしむるものは意志なり、想念はその意志より起り來るかぎりこれに與れり。……換言すれば、人をして人たらしむるものはその愛なり、信はその愛より起るかぎりこれに與かれり。故に意志即ち愛を以て人そのものとなすべし。……靈的活力を欠ける信はこれ一種の知にして信にあらず。僞りの愛は活力ある如く見ゆれども、その實は靈的死なり、生にあらず、云々。

一、何をか地獄の火及び切齒と云ふこと。

一、地獄にをる精靈が有する怨恨、及び凶惡なる術數のこと。

一、地獄の影像・位地・員數のこと。

一、天界と地獄との平衡（エクヰリブリアム）のこと。

一、人間に自由あるは天界と地獄との平衡より來ること。

此目錄を一瞥するものは「天界と地獄」とは如何なる種類の書物なるかを想見し得べからむ。うちみたる處にては、如何にも荒唐無稽の感なきにあらざれども、これを熟讀するだけの熱心と忍耐と勇氣とあるものは、必ずその報酬を手に入るゝの時期あるべし。尙此書の終りに、スエデンボルグの所說をそこてゝより拔きがきしたるものを掲載す

一、何人も制約なき仁慈（インミディエト、マールシイ）によりて天界に往くことなきこと。

一、天界に到るべき生涯を營むは人の信ずる如き難事にあらざること。

地獄界（ヘル）

一、主は諸の地獄を統御し給ふこと。

一、主は何人をも地獄に墮落させ給はざれど、精靈自ら此に墮落すること。

一、地獄にあるものは總て自己及び世間の愛より生ずる諸惡及び諸僞に住すること。

一、人は死後圓滿なる人身を有すること。

一、人間は他生においても、亦此世に在りたるときの如き感覺(センス)・記憶(メモリー)・想念(ソート)・情動(アッフエクシヨン)を有すること、及び死後此世に捨ておくは只物質的形骸のみなること。

一、人間死後の生涯は世に在りしときの如きこと。

一、各人の生涯に屬する歡喜は死後之に相應せる歡喜となること。

一、人の死後における情態第一。

一、人の死後における情態第二。

一、人の死後に於ける情態第三、即ち天界に入るものが教誨を受くる情態のこと。

一、天界における富者と貧者とのこと。
一、天界における婚姻のこと。
一、天界における天人の職務のこと。
一、天界の悅樂と幸福とのこと。
一、天界は廣大無邊なること。

精靈界（スピリチエアル、ウオールド）

一、何をか精靈界と云ふこと。
一、人はみなその內分（インテリオル）において一個の精靈なること。
一、死後の蘇生、及び永遠の生命に入ること。

一、天界における文字のこと。

一、天界の天人が有する證覺（ウイズダム）のこと。

一、天界における天人の無垢なる情態のこと。

一、天界における平和の情態のこと。

一、天界と人類との和合のこと。

一、聖言（ウオルド）によりて天界と人間と和合すること。

一、天界と地獄とは人類より成ること。

一、天界における異教徒即ち教會外の人のこと。

一、天界における嬰兒のこと。

一、天界における達者と愚者とのこと。

一、天界における表像(レプレゼンテイション)及び影像(アピヤレンス)のこと。

一、天人(エンゼル)着用の衣類のこと。

一、天人の住處及び家庭。

一、天界における空間のこと。

一、天界において會同(コンソシエーション)と交通(コンミユニケーション)とを規制する形式のこと。

一、天界における統治制度のこと。

一、天界における禮拜のこと。

一、天界における天人の力のこと。

一、天人の言語のこと。

一、天人と人間との談話のこと。

一、故に各天人は圓滿なる人體的形式（ヒューマン、フォーム）を具すること。

一、天界の全般とその各分體とを擧げて一個人に類するは主は神的（デイヴアイン、）人格（ヒューマン）なるが故なること。

一、天界一切の事物と人間一切の事物との間に一種の相應（コレスポンデンス）あること。

一、天界と地上一切の事物との間に相應あること。

一、天界の太陽のこと。

一、天界における光と熱とのこと。

一、天界における方位のこと。

一、天界における天人の情態變化のこと。

一、天界における時間のこと。

一、主は天界の神なること。
一、天界は主の神性によりて成ること。
一、天界における主の神性とは主に對する愛、及び隣人に對する仁なること。
一、天界は二國土にわかるゝこと。
一、三種の天界あること。
一、諸天は無數の團體より成ること。
一、各團體は小形式の天界にして、各天人は極小形式の天界なること。
一、全天界を統一して見るときは一個人に類すること。
一、諸天界における各團體は一個人に似たること。

明治四十三年此書の和譯成る。スヱデンボルグの宗教的神學的所觀を知らんとするものは、是非之を通讀せざるべからず。譯書は和本にて五號活字版、五百頁以上の大冊なるが上に、行文平易ならざれども、これを讀みもて行くうちに、心あるものは自ら感得する處あるべし。一讀險怪の如くにして、その中に深遠なる哲理を含む、之を翫味すれば、自ら首肯すべき處あり。道を求むるものは忍耐を要す。左にその目次を掲く、亦其一斑を窺ふの便とならんか。

天界（ヘヴン）

一、序言。

營せる際にも拘はらず、貴族院の一員として、當時瑞典の財政行政に對して忌憚なく堂々たる意見を發表して、その職責を盡したることなり。而して此意見は尋常學者、宗教家などがなし易き茫漠たる架空、抽象の所説にあらずして、何れも時弊に適中したる具體的方按なりしと云ふ。

一千七百五十六年、スエデンボルグ六十八歳のとき、此大著を出版してより以後、十五年間相次ぎて彼が公刊したる著書は大略左の如し。

千七百五十八年に「天界と地獄（ヘヴン、エンド、ヘル）」の著あり、こはスエデンボルグが親しく天界と地獄とにて見聞したる處を記せるものにして、專ら兩界の組織・經營・住民・性質などを述べたるものとす。（原版、四折本、二百七十二頁、倫敦出版。）

此不思議なる大書巻を印刷したるは、ジョン・リュウイスと云ふ人なり、スヱデンボルグは此出版元に命じて堅く著者の名を秘せしめたり。而して此出版元の言によれば、スヱデンボルグは此書の第一卷を著述するに當り、全一年を通じて、刻苦勵精、愈々原稿出來上りて之を印刷するとき、自ら二百磅を出金し、次に第二卷を出す時も更に又二百磅を拂ひて書肆の費用を助けたり、而も公刊の曉、彼は發賣の利益を一錢たりとも自ら收めんとはせず、悉く之を聖書傳布會社のために醵出したりと云ふ。因に、スヱデンボルグの哲學的・神學的著書は悉く羅甸文にて綴られたるものとす。

尙此處に注意すべき一件はスヱデンボルグが此の如き大著述を經

職を退くに當り、王はわが位を進め給ふよし申されたれど、わが我執の念を深めんことを恐れて、吾はこれを受けざりき」云々。

スヱデンボルグ、靈的生活に入りて以來、最初の大著述にして、天界の秘密を主より傳へられ、また自ら見聞したる儘を記述したる大書卷を「天道密意（アルカナ、カイレスチヤ）」と云ふ、一千七百四十七年、第一卷を倫敦に發刊してより、一千七百五十六年に至りて完結す。四折本の大册にして、八卷より成る、章を改むると一萬八百三十七、舊約全書中初めの二書、創世紀と、埃及記との靈的意義を細に入り、微に涉りて、殘るくまなく解說したるもの、縷々として千萬言を費し、縱說橫說する處、スヱデンボルグが蘊蓄・抱負・信仰・人物を遺憾なく發揚すと云ふべし。

は此の如く神の命令を果すべき精神の機關たることを信じて疑はざりしが故に、之を遂げんが爲には、拮据經營、少しの勞力をも厭はざりき。

スエデンボルグ、使命を受けて以來、尙暫くは瑞典國王の下に、鑛山局の檢査役となり、貴族院の議員となり、時局に對して已が盡すべき義務を盡したりしも、新生涯と共に舊生涯を送るは、心を二分する譯なるが故に、一千七百四十七年、五十九歲の時、彼は國王に啓して三十年間勤めたる鑛山局の役務を辭したり。王深く其功を思ひてその位階を進めんとし給ひたれど、彼は固く辭して之を受けず、王乃ち退職後も尙年給の半額を賜ふ事となし給ふ。スエデンボルグ曰ふ、「わが辭職の目的は今新たに主より受けたる使命を果すに全力を竭さんが爲に外ならず。

惠みを垂れ給へ、こはわれ自らのにはあらざればなり」と。此の如くにして彼は五十六年來の智的生涯を一蹋に蹋飜して、是れよりその死に至るまで、二十八年の生涯を全く神言の遂行に費やすことゝなりぬ。而して此二十八年間に於ける彼が精神上の活躍は誠に目覺ましき程にて、その剛健不屈なる、壯年の著述家をして其後に瞠若せしむるに足るものあり。

スエデンボルグは他の宗教改革家の如く、實地の活動をなさず、專ら其力を著述の上に注ぎたり。即ち天界と地獄との組織·內容·活動、此處に於ける天人·精靈·人鬼などの生活の狀況等を、その靈眼にて見たるまゝ、神意の許し給ふを限りとして、之を人間に傳へん事を勉めたり。彼

譬へば佛敎に於ける自力信者が、一轉して他力信者となれるが如し。他力を信ずるは安きに似て、その難行は自力に賴ると異ならず。 此間の消息は實地宗敎生涯を送りたるものゝ親しく知る處なり。

一千七百四十七年の四月、復活祭の日、スヱデンボルグ、敎會に詣で聖餐の式に列し、「イエスはわが最善の光なり」と云ふ讃美歌を聞き、家に歸りたる後、心の蕾開けて、その色みどりなるが如く覺え、その夜に入りて、聖淨極まりなき平和の心持を生じ、恰も天界に上りたる如く感じ、只「聖きかな〳〵、淸衆の主なる神は聖きかな、譽と名と榮とは無上尊のものなり」と叫ぶより外なかりき。 これよりして彼は曰ふ、「神の御意（みこゝろ）の儘なるべし。 吾は神のものにして、われ自らにはあらず、神よ、わが此事業に

は夢中のことにあらず、わが覺醒充分なる時に起りしことなり」云々。

こはスエデンボルグがその友ロブサームに語りたる一條の記事なり。此中には彼が從來の智的生涯を放捨するに當りて何等の苦悶なかりしが如く見ゆれども、また他の記事に依れば、彼はかの如き經驗ありし後も、暫くは日夜煩悶せざるを得ざりしなり。

一世を空しくする程の科學的天才・見識・學問を有し、既に此方面に於て、尋常ならざる成効を收め、尚此後も多大の希望を囑せられたる身にして、一朝此邊の功名を捨てゝ顧みず、自家の努力と理智とによらざる天主の啓示を其儘に傳ふる一種の器械とならんこと、スエデンボルグが胸中の不平・苦悶幾何なりしか、今より之を推しても知るべきなり。

よるものとは思ひなさゞりき。然るに、次の夜また前夜の人現はれたり、今度はわれ驚くことなかりしに、その人曰く、『われは神なり、主なり、世界の創造者にして、救濟者なり、われは聖典の靈的主義を人間に傳へんため汝を撰みたり。わが汝に言ふ所を汝書き記すべし』と。その夜、精靈の世界、地獄、及天界、わが眼前に開かれ、その中にわが曾て知れる人々のさま〴〵の狀態にあるを見、われはその悉く事實なることを確信するに至れり。この日よりして、われは一切世間の學問を捨てたり、主が命じ給ふがまゝに、聖靈の事物を此世の人に報告する事としたり。その後、主は毎日わが靈の眼に現はれ給ひ、他界に生じたる出來事を見せしめ給ひ、また此處に居る天人及び精靈と物語らせ給ひたり、而してこ

のが、將にこれを終らんとするに當り、何となく雲霧の如きもの、わが目の前に現はれ、わが食事の室の床上は、蛇蟇など云ふいやらしき動物に充てるを覺えたり、次第に昏く、遂に眞黑となりたりと見ゆれば、やがて雲霧一掃す。室の一隅に坐する一人の人あり、われは固よりわれ一人居ることと思ひたることとなるに、彼の異しき人、口を開きて、『食をすごす勿れ』と云ひたれば、吾驚きは尋常一樣ならざりき。其時吾が視覺また模糊となり、再び本に復するや、われは始の如く只一人その室に居ることを覺へぬ。われは此異變に心を奪はれ、急ぎてわが寓所に歸り、宿の主人には何の事もなかりしやふに見せかけたるが、われ自らは此事を深く思ひ考へ、その決して偶然にはあらず、また單に身體の狀況いかんに

第三　後半生

スヱデンボルグが靈的實驗は突如として始まれるにあらず、徐々として來れるなり。されば彼には何れの日よりして新たなる生涯に入れりと云ふが如きことなく、次第〳〵に實驗を重ねて、最後に從來の智的生涯をなげうつべき決心を生じたるなり。それまでには中々の苦悶、奮闘ありしは固よりのことなり。とに角、彼が最初の經驗は一千七百四十四年に起れり。彼は倫敦にありて、種々形而上の著述に心力を注げる眞最中、一夕平生の如く、ある處にて食事をなせり。今スヱデンボルグ自身の言を引かんに、彼は「饑を覺えたるため、大にその食進みた

第三　後半生

注したり。故に本書編述の主眼も亦此に在らざるべからず。スエデンボルグにして後半の生涯なからんには、彼は只卓越せる科學者として後代の崇拜を受くるに止まりしならむ。天の配劑は常に人意の表に出づ、棺を蓋はざれば事定まらざる也。

出したる天才なり、鑛山學・數學・工學・結晶學・天文學などにおいて、前人未發の學理を唱へ出したるのみならず、解剖學・心理學・哲學などの上においても、當時の學者より遙かに進みたる意見を有し、今代の學説を豫想したるもの少なからず。こは今日各方面における諸大家の悉く認知する所、わが贅辯を要せず。されどこれ以上にスエデンボルグをして彼自身たらしめ、その人の本來の面目を發揮し、而してかれをして宗教界における特殊の位置を保たしめ、また心理學上に古來未曾有の研究問題を供給せしむるに至れるは、彼が後半生の生涯に在り。彼一たび此の生涯に入るや、彼は科學上の大望を全く棄却し、智的方面における從來一切の企畫を放擲し、その全才能、全靈力を提げて新生涯の上に傾

慮と本願とによるものとなせり。スエデンボルグが思想・情操の益々明かに宗教的色彩を帶び來るも、今や一轉すれば、直ちに本職的宗教家の眞面目を活躍せしめんとするものあるを見るべし。彼が後半生における靈的生涯は決して偶然にして出來たるものにあらず、漸を逐ひ、次第を經て、恰も木の芽を抽き、葉を出し、花を開き、實を結ぶ如く、自然にして成れるものと思はる。固よりその成り上りたる處より見れば、始めより豫想し、豫期したるところとは、大にその面目を異にすべし、されどそはその自然の成熟を否定するものにあらず。

彼が靈的經驗なるものは、一千七百四十四年、彼が五十六歲のときに始まりたるものの如し。スエデンボルグは科學者としても當時に傑

に明かになり、自ら神靈の世界に出入するの妙智力を具ふるに至りたるものの如し。スヱデンボルグ自身は之を神の特旨によるものとなし、彼の信徒も此の如き經驗を以て、スヱデンボルグが非常の神寵を得たるによるものとし、如何なる技巧も、學術も此の如きを復現する能はすとなせども、予は竊かにその必ずしも然らざるべきかを思ふ。

スヱデンボルグが智的生涯より靈的生涯に遷らんとする過渡の時期に著作したる一書あり、これを「神の禮拜と愛」と云ふ、一千七百四十五年倫敦にて刊行す。此書はさきに「原理論(プリンシピヤ)」における如き數理的形式を脫し、宇宙の創始を寧ろ美術的・理學的方面より說けるものなり、神を以て諸科學の源泉となし、宇宙の間に現はるる智巧の跡を以て神力の智

何等の關係、何等の交渉なきものにあらずして、或る意味においては前半生の繼續・發展に過ぎずと看做さざるを得ず。但し彼の所謂る「靈性そのものの觀想」が或は彼の豫期したる所のものにあらざりしならんも知れず、されどそは彼の全生涯の發展と云ふところより見て、何等の交渉あらずとなすべし。

スエデンボルグは智的方面、分析的研究の方面より靈性そのものの生涯を探究せんとして、始めは化學・物理・工學等の修學を怠らざりしが、それより進んで生理學、人體解剖の學問に入り、ここにて、その非凡なる學理的天才の全部を傾倒し、如何にもして靈性の神秘に達せんとしたるが、尚その心に充分の滿足を與ふるを得ず、潛心密修の結果、心眼次第

べし。

「昔し競走者が最後の月桂冠を得るまでには、目的物を廻りて走ること七たびすべかりしと云ふ、われも亦これに倣ひ、歸着の點に到るまでは決して努力を止めざるべし。故にわれはわが進路を絕えず内面に向けて、靈性そのものに到るべき一切の門戸を排して、神旨を受けて、直ちにその中に入らんと思ふ」云々。

これによりてスヱデンボルグが後半生における靈的實驗の生涯は全く前半生における智的研究の生涯と相分離するものにあらざるを見るべし。一千七百四十四年、彼が五十六歲に達したるとき、古來未曾有の精神的經驗を得て、新生涯に入りしと云ふ、此生涯は前來のものと

「此等の諸說より進みて、純理的心理學（ラシヨナル、サイコロジイ）の本分に入る、即ち此にては行爲、外感、內感、想像、記憶、精神の情動（アフエクシヨン）、智性の情動、即ち意志と想念、それより理性の情動、本能の情動を論ずべし。而して最後には靈性（ソール）とその身體の上に現はるゝ狀態、身體との交涉、情動、不滅論、及び身體滅後の狀態を說き、諸組織に對する相應（コレスポンデンス）を以てこれを結ぶ。

「此に擧げたる梗概によりて、讀者はわが此書を計畫したる目的の何れにあるかを知り得べし、その目的とは即ち靈性に關する智識是れなり。此の如き智識は即ちわが研究の最後の歸着なり。而してわれは分析的方法（アナリチツク、メソツド）によりて、これに達せんとす。此の如き研究方法を始めより定めて殊更に之に由らんとするは、恐らくはわれを以て嚆矢となす

「動物界」の二書を著はすに當り、其思想の那邊に進まんとしつゝありしかを見ることゝすべし。　彼曰く、

「己が計畫は人體の全解剖を、物理的に、哲學的に、檢査せんとするに在り、内臓は言ふまでもなく、生殖の機關、五官の作用、それより大腦、小腦、延髓、脊髓の解剖、更に兩腦の細胞、纖維、人身全體の活力、運動の原因、病症、殊に頭腦における諸病、即ち腦髓より起り來る諸症を研究せんと思ふ。

それより更に進みて純理的心理學の門に入り、或る新しき學理の助けによりて、身體の物質的研究より無形の精神に關する智識を得んとす。

新しき學理とは形式（フォーム）の說、順序（オーダー）と度（デイグリー）との說、また連續（シイリイス）と團體（ソサイティ）との說、流入（インフラツキス）、相應（コレスポンデンス）、表象（レプレゼンテイション）、變容（モディフィケイション）の說これなり。

草稿のまゝにて殘れるものあれども、彼は此二書以外を剞劂に附するの意を有せざりき、何となれば彼はその後幾何もなくして古來未曾有の靈的實驗に接し、その生涯これより全く一變したればなり。彼は從來の哲學的·科學的研究を以て神意を遠ざかるもの、彼が天職にあらざるものとなし、其態度全く改まりたればなり。されど予の見る所を以てすれば、スエデンボルグが所謂る世間的生涯と靈的生涯との間には、全然相通ぜざる一大塹溝あるにあらず、前者の思想·感情は尙靈的生涯の上に連續するものあるに似たり。その文章·趣好·想念·論法など固より根本的革命を經たるは經たれども、尙その陰に往時の面目の髣髴せざるはあらず。この連結の跡を尋ねんがため、左にスエデンボルグが

上れるものに似たり。是までの間に此書の大綱と云ふべきものの數部の小冊子となりて、彼が手稿のまゝに殘りたるもの近年出刊せられたるが、此旅行中の研究によりて、此書は今や細目の處まで完成するに至れる也。此二部の書は和蘭と倫敦にて出版せらる。此はこれまでの無機界の研究より更に歩を進めたるものにして、有機界殊に人間の身體に關する甚深なる研究なり。始め「原理論（プリンシピヤ）」を出版してより此書の出版に至るまで、十三年間の勉學はスヱデンボルグをして人體の組織を研究せしめ、これより更に歩を進めて遂に靈界に入らざれば止まることなきに至らしめたり。

此二書はスヱデンボルグが世間的生涯における最後の出版なり、尙

旅行に、著述に、獨立の生涯を營ましめ得たるものは、檢査役としての給料以外に、此遺産ありしによるものならん。　一千七百三十六年の夏、彼はまた外遊の途に上る、こはその新著述を出版せんがためなりき。　旅途、かれは一々其紀行を記したるが、その記事によれば、彼が觀察と興味の範圍、如何にも廣く、其種類如何にも衆多なるを見るべし。　即ち食鹽の產出、冶金の術より、軍際の調練、各政體の得失、宗教的儀式の美術的・道德的觀察、歌劇の妙、建築、美術品等に至るまで、悉く彼が鋭利なる批評眼に入り來らざるはなかりき。

スエデンボルグが今回の旅行は重もに獨逸・佛蘭西・伊太利の諸國にて、「動物界の經濟」(オイコノミア、レグニ、アニマリス)と云へる書、次ぎて「動物界」(レグヌム、アニマレ)と云へる大著作、此間に出來

次に鑛物學の方面にては、鐵・銅・眞鍮の諸金屬につきて、實驗的學術的方面より最も精到なる觀測を下したるものにて、當時の學界に偉大なる貢獻をなしたるものなることは、その當時のみならず、後世に至りても尙明かに認められたるところなりとす。

此年(一七三四)、スエデンボルグはまた「無限に關する哲學的精論」なる小冊子を著はせり。「原理論」に對する附錄と見て可なり。

スエデンボルグはこれらの著述に因りて名聲今や歐洲全土に擴がり、諸國學者の數を求むるもの相次ぐ。

一千七百三十四年より一千七百三十六年の二年間は、スエデンボルグ本國に在り。その間に父を失ひ、多少の遺產を受く。他日彼をして

的に觀測する智識の義なり。　蓋し當時スヱデンボルグの解釋によれば、曰く、無限(インフィニット)あり、無限は自由獨立の存在にて萬物はこれより生ず、まづ無限の中に純粹の運動ありて此に點を生ず、此の點を單一となす、萬物は即ち此點より始まる。　總じて言へば、無限の一體中に動かんとする努力ありて此努力の千變萬化したる是れわが宇宙なり。　而して此運動の形式は常に螺旋的なる傾きありと。　スヱデンボルグはこれより進みて此原理を磁石學上の諸現象に應用し、次に世界出現の途程、並びに動物界・植物界・鑛物界の組織を亦これにて說明す。　これによりて見れば、此大著述は彼が形而下學における多年研究の結果なることを知るべし。

りしは、二度目の外遊の後にして、これより十一年間は實地と學問との兩方面に涉りて頗る研究する所あり。これスヱデンボルグが修養と學識の上に一段の光彩を添へんとする時期なりき。

此間にウプサラ大學における數學の講座その席を空しうしたるにより、大學よりスヱデンボルグを聘せんとの交涉ありしも、彼は純粹數學に對して多大の嗜好を有せざりしより、之を辭したり。

千七百三十三年、スヱデンボルグ、四十五歲の春五月、又々外遊の途に上り、萊府（ライプニッツ）にてその大著述の第一卷「原理論（プリンチピヤ）」を刊行す。此書は三卷より成り、全體の名を「哲學的及び鑛物學的著作（オペラ、フィロソフィカ、エット、ミネラリア）」と云ふ。

此の所謂哲學とは、今の哲學の義にあらずして、宇宙の組織を幾何學

物理學及び鑛物學の著述あり。いづれもその方面における甚深なる研究の結果なりと云ふ。此行は重もに各國の鑛山を調査して實地の智識を得んとするにありて、旅費一切はブルンスウヰック侯・ルヰ・ルードルフの支給に係れり。在外十五ヶ月にして歸國す。

歸國の後、間もなく、スエデンボルグは瑞典における通貨の高低につきて一著述をなす。この書の性質の如何は今知るよしなけれども、その後五十年ほどをへて、ウプサラにて再版に付せられたるより見れば、その中に有益なる材料を含めるものなりしを知るべし。スエデンボルグは貨幣論につきて一家の見識を有したりしものの如し。

スエデンボルグが鑛山局の檢査役（アッセスソル）として實際その職務に從事した

の要求權を放棄したり。これより彼はその全生涯を通じて亦婚姻のことを思はず、一意專心、わが研究をのみこれ追ひぬ。この一頓挫によりて、彼は遂に繫累なき一生を送るを得、神意を傳ふる外、また他念なきに至れり。是れ或は始めより神慮の存するところなりしかも知るべからず。

一千七百二十一年、スエデンボルグ三十三歳にして、又外遊しアムステルダムにて化學・物理學上の一著述を出版す、こは後來の大著「原理論（プリンシピア）」の前驅にして、自然界における諸現象を幾何學的組織に還源せんとするものなり。その外鑛物學・天文學上の著書あり。スエデンボルグは和蘭より獨逸に行き一千七百二十三年萊府（ライプニッツ）及びハンブルグにおいて

ありその一二をあぐれば、曰く錫板の製法、及びその効用。曰く古代に於ける海潮の水準。曰く船渠、堀割り、製鹽に關しての研究。

少壯有爲の數學者にして工學士たるスヱデンボルグはボルヘムの助手且つ弟子として、その頃、頻りにその家庭に出入したるが、遂にその第二女エメレンシアなるものを戀ひ慕ふに至りぬ。此女此時尙十四歲の少女なりしが、親なるボルヘム及び國王も彼女が將來ス氏の妻となるべきを喜びて承諾を與へたり。されどエメレンシアは、年長ずるに及びてスヱデンボルグとの婚約を好まず、これを破らんことを望みしかば、彼が失望落膽は一方ならざりき。されど彼はわが愛する人をしてわがために永く惱むことなからしめんと欲し、彼女に對する一切

校正をなすべき人さへなかるべきかを危みたるが、尤もの次第なりしと云ふべし。

彼は外遊以前より、當時瑞典のアルケミデスと呼ばれたる大工學者ポルヘムの知る所となりたるが、歸國後は王命によりて此人の助手となり、鑛山局の臨時檢査役（エキストラオルディナリイ、アッセスソル）に任ぜられたり。此役目に對しては、さして多額の給料なかりしも、スエデンボルグの天才と能力とは、これにて國王の認むるところとなれるわけなり。

その後二年をへてチャールス十二世の諸威を攻むるや、スエデンボルグは王のために軍用運送船を陸上に進ましむること十七哩の長きにわたらしめたりと云ふ。此頃の彼の著述に、數學上・工學上の諸研究

れ、幼時の宗教的・文學的傾向は、殆んど埋沒せるが如き觀あれども、此頃尙頻りに羅甸文の詩を作りたるより見れば、彼が文學的嗜好は渇し去りたるにあらず。また是よりして彼が研究科目の次第に第一義諦に進まんとするを見れば、宗教心の益々成熟の境に赴けるを察すべし。

スエデンボルグは歸國の後、國王チャールス第十二世の保護の下に數學上の雜誌「北國のダイダラス」を出刊せり。されどそののちには資金の欠乏によりて、二年の後に廢刊するの止むなきに到りぬ。千七百十八年(三十歲)のとき、ス氏、代數學の書を著はす、こは瑞典語にて書かれたる初めての代數書にして、該國にては此の如き書、未だ嘗て出版せられざりし也。數學の研究此の如くおくれがちなりし故、彼はその書の

時計師・道具の細工人・レンズの磨工などと共にその術を修得し、その頃自ら發明せんと計畫せる諸器械には飛行機・潜水艇・速射砲・空氣喞筒・ピアノ自奏機の類あり。その如何に近代的なりしかを見るべし。

彼が其頃の手紙に云ふ「余はあらゆる新奇なる事物を喜ぶ、否、一年を通じて、日々何か新たなるもの丶生じ來らんことを願ふ。如何なる時代にも舊習を守り、舊套を墨ふものは、頗る多けれども、合理と研究とに基きて、新たなる田地を開拓せんとするものは、百年に六人より、十人を出でず」と。當時スヱデンボルグの意氣一世を空しうするものありと謂ふべし。

彼が外遊中の研究は專ら數學・物理學等、所謂る形而下の學問に限ら

は殆んど成熟せる人の如くに强健有力なりしと云ふ。

彼は又此頃「傳道書」の第十二章を羅甸文に直し、父の著述中に收めて公にしたるが、その文章の詩的にして典雅なる、如何に彼が古典に堪能なりしかを見るべし。後來彼の著述は悉く羅甸文にて綴らる、流暢明快、意の到る處、筆隨はずと云ふことなし。

千七百十年、スヱデンボルグ二十二歲、大學を卒へて後、外國に遊學すること五年、英國・和蘭・法朗西・獨逸を遍歷し、修得すること頗る多し。故國における數學及び物理學の發達の遲々たるを慨し、ウプサラ大學において神學及び歷史の講坐を削減しても、高給の數學教授を招聘せざるべからざることを議せり。彼はまた器械學を實地に練熟せんため、

仰の生命は慈善即ち愛にあり、而しかく信をして活氣あらしむる慈善、即ち愛とは、隣人に對する愛の義に外ならず、而してこは神が各人のために證據し給ふ所とす、されど之を受持し得るは、この慈善を躬行せるものにあらざれば能はず」云々。これによりて、スヱデンボルグは幼時より大に宗教的傾向を示したるを見るべし。こは彼が家庭の薫陶によるものなるは言ふまでもなけれど、その所言の老熟せる親を驚かしたりと云ふより見れば、彼に宗教的天才ありしや必矣。

彼は十一歳にしてウプサラ大學に入り、語學・數學・鑛物學・自然哲學を學び、二十二歳にして業を卒へ、哲學士の學位を受く、そのときの論文は羅馬の哲人、セネカ及びミムスに關せるものにして、彼が倫理上の意見

名を賜はりぬ。かくしてエンマニュエルは貴族院に籍をおき、國政を講ずるの身となれり。

スエデンボルグ幼時の事蹟は餘り世に知られず、只彼が後年友人に與へたる手紙の一節に左の記事あり、曰く、「貴下は予が幼時を知らんと云はるゝが、予は四歳より十歳に到るまでは、絶えず神のこと、救ひのこと、及び人間精靈上のことを考へる外あらざりき。予は屢〻わが所言の中に高妙の理を交えたりと見え、これがため兩親を驚かしたることありき。また時には天人ありて予が口を假りて物言ふにはあらざるかと思はしめたることありきと云ふ。六歳より十二歳に到るまでは、信仰に關して、僧侶と物語るを最大快事となし、時々彼等に告げて曰ふ、信

第二　前半生

スエデンボルグはその名をエンマニュエルと云ふ、瑞典の人なり。その家族はもと農家にしてまた多少の鑛山を所有したり。ス氏は一千六百八十八年(貞享五年)一月二十九日、首都ストックホルムに生る。當時その父は軍隊に附屬せる僧官なりき、その後累進して長老となり、ウプサラ大學の神學教授となり、遂にはスカラ地方の僧正に任ぜられたり。エンマニュエルは此の人の第二子なり。その頃はスエッドベルグと云ひたるが、一千七百十九年、エンマニュエル三十一歳のとき、ウルリカ・エリアノルル皇后、ス家をして貴族に列せしめ、スエデンボルグの

第二　前半生

かりなり。科學者として彼が研究したるところは、數學・物理學より天文學・鑛物學・化學・冶金術・解剖學・生理學・地質學・博物學に及びたり。また哲學者としては、其時代に知られたる一切の學說を研修し、各種の方面に貢献したる所は、何れも獨創の見なると同時に、その影響の及ぶ所少なからず。而して彼はまた一個の政事家・理財家にして、通貨及び財政に關しては實地の意見あり、此方面に於ても尋常一樣の人物にはあらざりしなり」云々。

はざらしめんとするあるに過ぎず。彼が諫下の德はその一生を通じて最もその特色とする所なりき。

「また彼は科學及び哲學の研究を始めてより以來、大慈大悲にして無限なる神性あり、至上の力を有することを認め、また何か同胞のためになるべきことを發見するに非ざれば、彼が研究は何等の効能もなきものと思惟したりしが如し。彼は常にその眼を實用の方面に注ぎたり、今日玆に集り給ひたる諸君の中には、ス氏が如何に發明の才に富み、其範圍の如何に廣かりしかを聞きて驚愕の念を起し給ふもの少なからざるべし。ス氏は常にその自ら發明すべき事項の表を作りて、之れに說明を加へおきたるが、今これを見るに、殆んど前例なしと思はるゝば

れば、峯又峯、層々として遂にこれを攀ぢ盡くすことを得ず、是まで思ひ設けざりし壯嚴の光景に接し、吾人をして到底その全光景を纒め見ることを得ざるの感じを起さしむ。ス氏の生涯と事業を組織的に研究するものは、何れも上述の如き感想を抱かざるはなかるべし。

「スエデンボルグの一生の出來事を細かにたどり行けば、行く程、彼が八十餘年の生涯は清淨無垢の白蓮花に似て一塵の汚點を止めざるを見る。彼は名聲の爲めその身を誤ることなかりき。王公の寵も以てその謙讓の德を損ずるに足らず、成功の赫々たるも以てその虛誇の念を動かすに足らず。科學上の發見ありとも、自ら進みてその功名を吹聽することを爲さず、只後人をして彼がために之を辨し、その功を他に奪

「スエデンボルグを以て詩人となすとも、哲學者となすとも、大科學者なすとも、神學者となすとも、彼れが一生を通じて見るときは、その研究・實驗の上にそれ〴〵の次第ありて、一種分明なる階段の存するを覺ゆ。而して此階段には歩々の進歩あり、その前なるは、後なるものゝ準備なる如く見ゆ。　故に吾人もし彼が靈照（イルミネーション）の時を以て、其老年に於ける大事業の始まりを示すとなすときは、これ以前に於ける彼が一切の經驗は之に向ひての一大準備なりしを認め得べし。

「スエデンボルグを以て單に人物紀傳上の材料と看做すときも、彼は猶ほ大平原の上に巍然として屹立せる山嶽の如く、之を遠くより望むときは、堂々として少しも亂れざる威容あり、而して之に近づかんとす

に集りたるものゝ心持は必ずしも一樣ならざるべし。即ち或人は彼を以て科學上に於ける英才となし、遠見達識を有したるものとなすならん、また或人は彼を以て光彩陸離たる獨創の哲學者となすことあらん、また或人は彼を以て證覺を得たる明眼の人、天命を受けたる神學者となすことなるべし、而して此第三種に屬する人は自ら此會の大多數に屬することと思ふ。かく吾人は各スヱデンボルグに對して其見解を異にすれども、ス氏が多方面の人なりしこと及び當時に於ける最も深遠なる學者の一人なりしことゝ云ふに至りては、吾人の悉く承認する處なり、而してフレデリック・デニスン・モーリスの言を假りて云へば、ス氏は實に此當時に於ける一大天才なりしなり。

からざる生涯より、好ましき生涯に移る過渡に過ぎず、否、スエデンボルグの立説を信ずるときは、死と云ふも一杯の水を飮むほどに大切なるものに非ざればなり、」云〻。曾てヘブケン伯の言ひし所は今日と雖も尙その眞なるを失はざる也。

此緖言を結ぶに當りて、去る明治四十三年の夏、倫敦市にてスエデンボルグ協會の創立以來五十年を經たるを祝せんがため、萬國大會を開きたるとき、その會長に撰ばれたるエドワルド・ゼイ・ブロードフイルド博士が就任講演の一節を玆に譯載すべし。該講演はよくスエデンボルグの人物・功業・學問を極めて公平に述べたるものなり。博士曰く、

「われらは今一堂に集りてスエデンボルグを記念することとなるが、玆

ヘブケン伯はス氏の生時に於ける瑞典の宰相にして、彼を知ること四十二年の久しきに渉れる人なるが、その人嘗て友人に書を送りて云ふ、「予は國王と物語りの序にかく言へることあり、もし新殖民地を建設することあらんには、スエデンボルグの聖書に基きて、發展したる宗敎を採用し、これを以て其新國土の國立宗敎となすに如くはあらざるべし。其理由二つあり、第一にス氏の所說は如何なる宗敎にも立ち優りて、最も正直にして勤勉なる國民を養成するに足れり、何となれば彼は用（ユース）を以て神を崇めんとするもの、而してこは物理當に然るべき所なればなり。第二にはスエデンボルグの敎に依れば、何人も死を怖るゝとなかるべし、そは死なるものは甲の情態より乙の情態に移り、好まし

にても之を他人の心の上に加へ得るものにもあらず、必ずやその人の内より湧き出て、自然に華を開き、實を結ぶより外あらず。されば宗敎渴望の人心に對しては、種々の信仰・哲學をあらゆる所より紹介し來り、各その心の傾きに稱へるまゝに之を擇み知らすやうにせんことを要す。スヱデンボルグの所述固より悉く之を信ずべからずとするも、瓦礫の中に金玉なしとは云ふべからず、金玉は何れの世にありても金玉なり、或る特種の包物の中に存するの故を以て之を斥くるは愚の至りなり。

予は現時の日本に在りてスヱデンボルグの研究の極めて有益なるを思ふ、今その理由を左に擧げんに、

實は充分に研究すべき價値なくばあらず。殊に此事實たる、われらの道德的・宗教的生涯の上に大關係あるものなるより見れば、決して之を等閑に付すべからざるなり。

殊に吾邦精神界の現狀を察するに、物質的・實業的文化の淺薄なるに飽き果てたる如くにて、尙ほ未だ歸着する處を知らず、政府も國民も宗敎の必要なるを感じながら、尙如何にして其必要に應ずべきかの方法に至りては、充分に講究せられず。宗敎なるものは、制度としては國家全體の上に連關すると勿論なれども、一面より見れば、宗敎は全く個人的にて、その人々の性質・嗜好・敎育・境遇などに支配せらるゝものとす。されば無理に政府の權力にても之を强ゆるを得ず、又傳說の惰力のみ

のあるを發見せりなど云ふときは、讀者は其所言の如何にも現實なるに一驚を喫し、却てこれを信ぜざらんとするなるべし。スヱデンボルグの此の世の人に受けとられざる一原因は確かにその餘りに細目に渉れる如く思はるゝ處に在りと予は信ず。

されど此の如きは、畢竟ずるに瑣細のことなり、これあるが爲に全體の信ずべく、合理的可能なるを疑ふべからず。スヱデンボルグの所述には一貫して眞率誠實の氣あり、彼は決して自ら僞る人にあらず、唯、其見たるところ、聞きたる處をその儘に述べて何等の飾るところあらず。これを信ずると信ぜざるとは別問題にして、彼が此の如く眞率なるには必ず其原因あるべし、而して此原因は必ず事實なるべきが故に、此事

せるにはあらざるか、狂者の言は果して信ずるに足るべきかと。

またこれに附加して、第三の理由とも云ふべきは、彼が所述の細目に渉り過ぎたるが如くに思はるゝことこれなり。常識以外に出でたることならば、斯くまで、微に入り、細に入りてまで能くその情況を悉すこと、却て人の信仰を離すの基となるべし。エッマスンの如きは、此點に於て大にス氏に心腹し得ざるものあるに似たり。例令は地獄あり、天界ありと云ふだけならば、之を信ぜん人多からんも、その地獄には、何々の人ありて、今現に焦熱地獄の裡に煩悶するとか、また天界の第一區には、歴史上知名の士何某あり、われ親しくこの人と語り、その人の所説を聞きたるに、彼等が此世に在りたるときよりその意見の大に變化せるも

論理の點のみより見れば、荀子傳ふべきなり。スエデンボルグの場合に於けるも亦然り、彼の文章にして絢爛目を奪ふ如きものあらんには、彼の名は嘖々として、世人の口に上りたることならん。

第二の理由は、彼の所述はわれらが五感の世界を離れたる他界のことなるが故に、普通の人々には稍信をおき難き所少なからず。殊に彼は此の如き諸事物を說くこと、恰も日常飮食のことを言ふが如くにて、彼は眉毛一筋だに動かすことあらず。余り其の眞面目にして、怪奇を交へざる所、却て讀者の疑を挾むの種子となる。曰く、著者は果して此の如き實驗をなしたる人か、彼の言ふ所常識以外に出ると何ぞ斯の如く甚だしきや。而も彼は平然として之を語るより見れば、彼は或は狂

き觀あると是なり。　凡そ人の名の後世に傳はると傳はらざるとは、必ずしもその思想の高邁なるとならざるとにあらず、平凡の思想にても述ぶるに巧妙の文章を以てすれば、その文章の故を以て、その人の傳はること多し。　たとへば威儀堂々たるものは、その所言必ずしも超群の妙なくとも、これに對して耳を傾くるものは自ら多きが如し。　衆人は常に先づその五感の上に深き印象を受けんことを望む、所謂その調愈〻高くして之に和するもの愈〻少き、是れ。　孟子の說、必ずしも荀子の如く理直く論正しきにあらず、されどその世人に喜ばるゝこと多きは、孟子の筆端には風雲を起すの妙あれども、荀子のには淡々として何等の奇なし、されど論理の道筋立ちをることは、遙かに孟子にまされり。　その

てその所説には怪幻を極むるが如きこと毫もこれあらず、平々坦々としてわれら五官の世界における諸事物を語るに異ならず、聽くものは驚きて、眼眩し、心昏することあらん、而も彼は冷然として家常茶飯の事となす、これ彼が窺測し易からざる所なり。

スエデンボルグの人物此の如く、その所説かくの如しとせば、彼は世に知られざるべからざる所の人なり。彼れと時代を同じくしたるカント、ウエスレーの如く吾等の間に傳へられて然るべき人なり。然るに其所説が僅かに一部の人々に信ぜらるゝに過ぎざるは、何故なるかと云ふに、その重なる理由二あり。一は彼が文章の如何にも冗漫にして、同じやうな事を繰り返し〳〵說く處、恰も老爺が小兒を敎ゆるが如

之を學術と宗敎とに委ねて、平々淡々の裡に無限の妙趣を湛へたる處、心あるものをして二十世紀の今日、尙その人格の力に動かされざるを得ざらしむ。たゞこれだけにても、われらは彼の一生を知り置きて當に然るべきわけなり。

その著書を讀み、その傳記を調べ、その思想を見るときは、スエデンボルグの人格の髣髴として自らわが眼前に出現するを覺えしむ。一個の好老爺、脫俗の氣其眉宇の間に溢る、色身は尙ほ塵世の累に纏はれざるにあらざれど、心眼は常に天界の幽妙に充ちて、步々雲涌き、足下妙樂自ら奏するの趣なくばあらず。人もし翁に對して天道の事などを問へば諄々として彼がために辯ずると、猶ほ溪流の盡きざるが如く、而し

べき第三點なりとす。

以上三件の一だけにても、スエデンボルグは充分の研究を値するものなるが、これに加ふるに、其人物の如何にも古今に獨歩して、その類例を見難きほどなるを以てするときは、われらは彼が決して閑却すべき人物にあらざるを感ぜざるを得ず。科學の天才と宗敎の天才と妙に抱合して一種窺測すべからざる底の人物を生じたるは、心理學上より見て研究の好材料たるのみならず、その精力絶倫にして而かも出俗脫塵の大偉人たりし彼の一生は、亦個人の好典型として吾等に多くの敎訓を與うるものとす。彼の傳記には波瀾重疊の變化なく、これがために人目を眩惑する底のことあらざれども、彼が八十四年の生涯は、全く

得るが如し。　此別世界の消息は現世界と何等道德上の交渉なしとするも、科學的・哲學的には充分に興味あり。　是れス氏研究の第二點なり。

スエデンボルグが神學上の所說は大に佛敎に似たり。　我（プロプリアム）を捨てゝ神性の動くまゝに進退すべきことを說くところ、眞の救濟は信と行との融和一致にあること、神性は智（ウキスダム）と愛（ラヴ）との化現なること、而して愛は智よりも高くして深きこと、神慮（ディヴァイン、プロヴィデンス）はすべての上に行き涉りて細大洩す事なきこと、世の中には偶然の事物と云ふもの一點もこれある事なく、箸の一運び（ひとはこび）にも深く神慮の籠れるありて、此處に神智と神愛との發現を認め得ること、此の如きは何れも宗敎學者、殊に佛敎徒の一方ならぬ興味を惹き起すべきところならん。　これスエデンボルグの研究す

のと信ずるは、極めて少かるべし。もし此の如き人ありとせば、之は彼を以て異常なる心理的現象となし、此方面における研究材料の一となすに過ぎざるべし。されど眞面目にスエデンボルグを研究するものは、諸種の方面に於て、彼は興味多き研究の主題なることを發見すべし。

まづ彼は天界と地獄とを遍歴して、人間死後の狀態を悉く實地に見たりと云ふが、その言ふ處如何にも眞率にして、少許も誇張せるところなく、また之を常識に考へて見ても、大に眞理に稱へりと思ふところあり、これスエデンボルグの面白味ある第一點なり。

此世界には五官にて感ずる外、別に心靈界なるものあるに似たり、而して或る一種の心理情態に入るときは、われらも此世界の消息に接し

第一 緒言

スエデンボルグの名は吾國にては餘り人に知られず。ルーテル、ウエズレイ、ジヨン・フヲックス、カルヴインなど云へば、多少泰西宗敎のことに注意するものは、その名を知りをることとならん。されど今より百五十年ほど前に當り、瑞典の國に古今獨步の神學者興り、天堂・地獄を親しく巡見したるのみならず、天界の主なる人にさへ面謁し、これと談話を交へ、神學上・哲學上・心理學上の新發見を爲したることありと云ふに至りては、これを知る人甚だ多からず。又たとひ此の人の名を聞きたるものにても、彼を以て今日の文化、今日の思想に關係することあるも

第一　緒言

目次

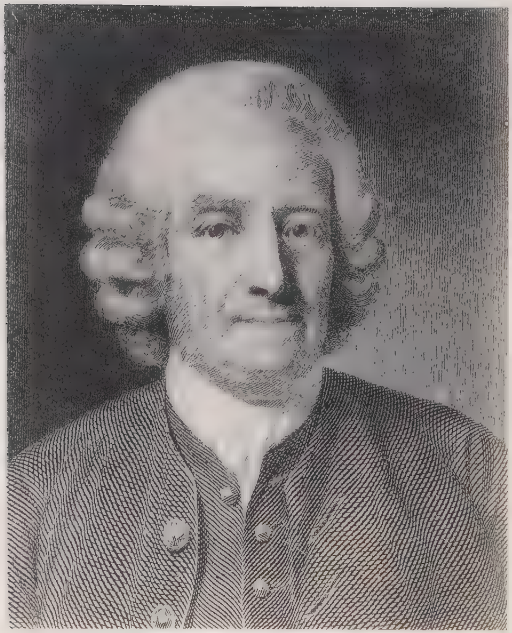
第一、緒言……一
第二、前半生……二三
第三、後半生……四九
第四、一隻の靈眼……八九
第五、人物、生涯……九七
第六、所見、所言一般……一一七

序

神學界の革命家、天界地獄の遍歴者、靈界の偉人、神祕界の大王、古今獨步の千里眼、精力無比の學者、明敏、透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身に集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗敎思想界の風雲、漸くまさに急ならんとす。精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此の書の成れる所以。

大正二年十月

著者しるす



EMANUEL SWEDENBORG.

1913

12797

THIS BOOK MUST BE
RETURNED

スエデンボルグ

Swedenborg

鈴木大拙著

T. Suzuki

Shiu Ei Sha pub. co.

To the
Pacific Theological
Seminary —
Compliments of the
New-Church Exhibit -
Palace of Education —
Pan-Pac. International
Exposition,
San Francisco,
Cal.
— 1915. —

GTU Library
3 2400 00602 1483

PRESENTED BY
New Church Exhibit
Panama Pac. Exposition

GTU Library
2400 Ridge Road
Berkeley, CA 94709
For renewals call (510) 649-2500

All items are subject to recall